監禁愛

東めぐみ

プロローグ

☆☆

　果てのない海の底を彷彿とさせる室内はどこまでも静まり返っている。だが、それは異様な熱さを孕んだ静謐さでもあった。

　よくよく耳を澄ましてみれば、時折、その不自然なほどの静けさの底をひそやかな物音が這うのが聞こえる。あえかな声は苦悶を告げる呻きにも似ているのに、どこか艶めかしく濡れている。

　人の重みでベッドのかすかに軋む音、衣擦れの音が吐息混じりの忙しない息遣いに重なる。薄闇にふいに一つの光景が浮かび上がった。それは天蓋付きの大きな寝台でもつれ合う二つの影だった。大きな影と小さな影が烈しく絡み合い、離れたかと思えば、また引き寄せられる。

　若い男が華奢な女を寝台の上で組み敷いていた。まだ女と呼ぶにはいささか若すぎる幼さを可愛らしい面立ちに残しているが、少女の身体は小柄ながら、既に成熟した女性のものだ。

　男の唇が真冬に降り積む真白な雪のような膚の上を這い回る。熱い口づけで熟した林檎のような唇から、ふくよかに育った乳房の頂を辿りながら、男は幾度も少女の名を呼び、請うた。

「愛奈、お願いだから、俺の名を呼んでくれ」

　男はただひたすら希(こいねが)う。まるで、少女の白い身体を夜毎、日毎、こうして蹂躙することを悔いて許しを請うように。彼女から愛されない自分を憐れんで欲しいかのように。

　だが、少女はけして彼に愛を返してはくれない。数日前に初めて純潔を失ったときに泣き叫んだ彼女とは別人のように、時折、堪えがたい艶めかしい吐息を洩らす。それが彼の女体を知り尽くした巧みな愛撫の成果によるものだと彼は誰よりも知っていた。

　強情な彼女はそれでも彼の愛撫に感じている自分を認めまいと唇を噛みしめ、寝乱れたシーツの端をしっかりと握って声を洩らすまいと健気な努力をしているのだ。

「それで良い、小鳥はただ愛らしいだけでは物足りない。飼い慣らされまいと必死にあがくその姿こそが籠の鳥にふさわしいもの」

　お前は声を洩らすまいと堪えているその表情こそがかえって男の嗜虐心を煽っていることをまだ知らないのだね。

　耳許で濡れた声が聞こえ、熱い舌が耳朶をネロリと掠めた。

「今はそれでも良い。だが、憶えておいで。お前はいずれ俺の手に堕ちてくる。そして、快楽という名の魅惑的な鎖でお前の翼を縛り付け、二度と私の許から逃げ出そうなんて考えられないようにしてやろう」

　男は気まぐれに弄んでいた少女の胸の頂をそっと口に含んだ。執拗に弄られ吸われ続けた胸の蕾は唾液に濡れ光り、ほの暗い室内でもそれと判るほど淫猥に見えた。

「お前が幾ら強情を張ろうと、身体は正直だ。ご覧、ここはこんなにも俺を欲して固く凝(しこ)っている」

　熟れたグミのような二つの先端がまろやかな双つの乳房の上で誘うように揺れていた。さんざん弄り回された胸の先端は固く凝り、勃ち上がっている。彼がいきなりその一つをすっぽりと口

に含むと、少女は苦しげな喘ぎ声を上げた。
　いや、それは苦しさを訴えるというよりは、堪え切れない快楽を逃がそうとするような―。
　男が少しだけ力をこめて噛んでやると、少女が悲鳴を上げた。
「ぁ、ああっ」
「気持ち良いのか痛いのか、最早、お前には判らないのだろう？」
　男が恍惚とした表情で少女を覗き込む。その小さな愛らしい顔は涙に濡れていたが、それでも、瞳はまだ反抗的な輝きを失ってはいない。残った意思の力を総動員して睨みつけてくる彼女の漆黒の髪を宥めるように撫で、彼は極上の笑みを浮かべた。
「これだ、この眼だよ。俺はお前のこの眼が堪らなく好きなんだ。すぐに堕ちる女なぞ、端から興味はない」
　もう一度、乳房の先端を甘噛みしてやると、少女は今度ははっきりと鼻にかかるような甘い吐息を洩らした。二人きりの室内には誰もいない。それでも男は自分以外の何者にも女の淫らな声を聞かせまいとするかのように、その形の良い唇を狂おしいまでのキスで塞いだのだった。
　少女は奪い尽くすような口づけで呼吸するのもままならない。ただひたすら涙を流し続ける。
―どうして、こんなことになってしまったの？
　兄のように一途に慕い、心から信頼していた男のあまりといえばあまりの豹変がいまだにまだ悪い夢を見ているようで信じられなかった。

Ｓｕｄｄｕｎｅｓｓ（運命の狂った日）

愛奈は深呼吸を一つした。これから向かうことは、先に進む上では、どうしたって避けて通れるものではない。父の娘として、亡くなった父のためにもきちんと対処しなければならないものだ。何故なら、愛奈はそれができるたった一人の人間だから。
愛奈は無意識の中にセーラー服の白いリボンを指先で引っ張っていた。
よく磨き抜かれた廊下を辿り、応接室のドアを開ける。かなりの広さを持ったそこにはオーク材の重厚なテーブルといかにも座り心地の良さそうなソファが対になっている。広く取ったガラス窓は庭園に面していて、手入れの行き届いた庭が一望に見渡せた。
「お待たせしました」
わざとつんと顎を反らすようにして、ゆったりとした足取りで室内に入りドアを閉める。その拍子に複数の視線が一斉に自分に注がれるのが判った。
招かれざる客は二人、やたらと背の高い坊主頭、小柄なニキビ跡の目立つ男の二人組だ。二人ともに黒いスーツに黒いサングラス、いかにもといった雰囲気で、違うといえば、のっぽの方はスーツの下に白いシャツを合わせているのに引き替え、小男は派手な今時流行らないアロハ柄のシャツを合わせていることくらいか。
判りすぎるくらい判りやすい男たちに、思わず失笑が洩れそうになってしまう。と、忍び笑いに気づいたのか、小男の方がいきなり喚いた。
「何だ、何がおかしいってえんだ」
愛奈は淡く微笑んだ。
「いえ、別に」
借金の取り立てというよりは吉本新喜劇の売れない芸人の方が似合っている一とは流石に言うだけの度胸はなかった。
と、それまで黙り込んでいた傍らの坊主頭が高々と組んでいた両脚を解いた。
「見たところ、随分と余裕があるようだが、お嬢さん。前もって用意しておくように指示した金は工面できたのか？」
愛奈は更に傲然と顔を上げた。
「いいえ」
彼女は彼らの向かいに座り、勝ち気そうな瞳に更に力をこめた。
「何だとォ。手前、俺たちを馬鹿にしてるのか、子どもの遣いじゃねんだからよぉ」
ニキビ跡の男が叫ぶのに、横から坊主頭が片手を上げて制した。
「言っておくが、俺たちも遊びで来てるんじゃないんでね。あんたの親父さんが残した金はきっちり耳を揃えて用意しておけと言ったはずだが？」
男はテーブルの上のクリスタルの灰皿を引き寄せ、ポケットから出した煙草に火を付けた。
「失礼ですが、部屋が汚れますので、煙草はご遠慮頂いております」

　余裕を滲ませた口調で言うと、坊主頭がフと小馬鹿にしたように鼻を鳴らし、火の付いたばかりの煙草を灰皿に押しつけた。
「なかなかたいしたお嬢さんだ。だが、この屋敷はもう、あんたのものでも死んだ親父さんのもんでもないはずだ。あんたの親父はこの屋敷を抵当に俺らから金を借りたんだからな」
　愛奈はクッと言葉につまった。男の言葉は的を射ている。父はこの家を抵当にサラ金から金を借りたのだ。その金が返す目処が立たない今、愛奈が幾ら訴えようと、正当性は男たちの方にある。
　愛奈が押し黙ったのを見、男は更に続けた。
「更にそれを言うなら、この世の中には今、あんたのものだと言える所有物は何一つないとも言える。あんたのその身体さえもね」
　そこで、愛奈はじっとりとした視線が自分の身体に這うのを感じた。
「なあ、お嬢さん、俺たちだって鬼でも蛇でもねえ。父親が首吊って行き場がなくなった哀れな小娘に億のつく金を返せないことくらいはよく判ってるさ。だから、お前にはお前にできることをやってくれれば良いんだ」
「私にできること？」
　愛奈は息を呑んだ。いつしか百戦錬磨の男に上手いように話に乗せられたのも気づかない。
「そうとも。あんたにしかできないことがある」
　男は少し気を持たせるような勿体ぶった物言いをし、見せつけるようにまた脚をゆったりと組んだ。
「どうだ、うちの社長がやってる事務所に所属しないか？　そうなりゃ、あんたも明日からすぐにドラマの主演女優だぞ」
「女優？　ドラマって、それ、もしかして」

愛奈は唇を噛んだ。そこまで愚かでも世間知らずでもない。自分のようなずぶの素人がすぐにドラマで主演できるなんて甘い話がそうそう転がっているはずもないのだ。
「アダルトですか？」
　つまり、この男どもは愛奈にＡＶ女優になれと言っているのだ。あまりの屈辱に、愛奈は顔が燃えるように熱くなった。愛奈の心など知らぬげに、坊主頭の男は滔々と喋る。
「マ、見たところ、あんたは処女のようだし、それだけ出演料は高くなるはずだ。大体、ＡＶに出るような子で、処女なんていないからな。初出演でロストバージンが撮れるなんざ、なかなかないチャンスさ」
　次々と繰り出される言葉に心が抉られるようだ。屈辱をとうに通り越して、傷つけられた心は血の涙を流していた。しかし、男は愛奈の沈黙を躊躇いか恥じらいと勘違いしたらしい。
　今度はやや優しい声音で宥めるように言った。
「いきなりＡＶが嫌なら、モデルはどうだ？　もちろん、脱ぐことに変わりはないが、性行為を強要されることはないぞ？　まあ、いつまでもというわけにはいかないだろうが、気持ちの整理がつくまでくらいは待ってやっても良い」
「私」
　お断りしますと言おうとした愛奈の機先を制するように男が鋭く言った。
「言っとくが、俺はあんたに選択権を与えたわけじゃない。ただ、ほんの少しの情をかけてやっただけだ。こちらが優しくしてやったからと言って、あまり図に乗らない方が身のためだぞ、お嬢ちゃん」
　愛奈の息を呑む音がヒュッと聞こえた。
「さて、どうする？　明日にはこれまで後生大事に守ってきたバージンをあっさりと棄てるか、それとも、しばらくは脱ぐだけにするか。この場で選んでくれ」
　坊主頭に言われ、愛奈は唇を噛みしめた。固く眼を瞑り、戦慄く声で返す。
「ＡＶに出るのは嫌よ」
「なら、モデルになるんだな？」
　念を押すように問われ、愛奈は小さく頷いた。愛奈の気が変わらない中にと坊主頭が顎をしゃくると、それまで出番のなかったニキビ面がいそいそと持参したブリーフケースを開いた。中から数枚の書類を取り出した。
「話の理解が早くて結構だ。こんな場面で修羅場を演じるのは俺も苦手でね。中には泣きわめいたりする女の子もいるんだが、あんたは度胸が据わっているらしい。それじゃ、手始めに、ここにあんたの名前と印鑑を一、ああ印がなければ拇印でも良い」
「それは何ですか？」
　愚かな何の力もない小娘だとて、言われるがままになる必要はない。愛奈が力なく問うと、男がニヤリと口の端を引き上げた。
「契約書類。別にあんたを騙くらかすつもりなんざないから、よおく読んでみるんだな」
　男が言い終わらない中に、横から小男が何やら囁いた。ちらちらとこちらを見ながら耳打ちする視線はねっとりしていて何か嫌な鳥肌が立つようなものを感じる。坊主頭が頷き、また、こち

らを見た。
「契約の前に、確かめたいことがある。まず、あんたが使い物になるかどうか、この眼で確かめさせて貰う」
　愛奈は膝の上で組んだ両手に力をこめた。
「それはどういうこと？」
「言葉どおりさ。モデルになるというのなら、モデルとして通用するのか、事前に確認するんだ」
「一体、私に何をしろと―」
「服を脱いでくれ」
　無情にも言い放たれ、愛奈は黒い瞳を忙しなくまたたかせた。この男は私にこいつらの前で服を脱げというの！？
「お断りします」
　考えるよりも前に言葉が飛び出していた。
「そんな恥をさらすくらいなら、死んだ方がマシだわ」
　プイと顔を背けた愛奈を見つめながら、坊主頭の男が小馬鹿にしたように嗤った。
「流石に世間知らずのお嬢ちゃんは甘いねえ。良いかい、あんた、世の中はそれほど甘くはないんだよ。ヌードだって馬鹿にしてるんだろうが、それでもモデルはモデル、仕事は仕事なんだ。身体にたとえ滲み一つでもあれば、あんたはモデルとしては失格なんだぞ。いつまでもお高く止まってるんじゃねえッ」
　一見、物静かな雰囲気を纏う男が放った怒声に、愛奈は震え上がった。所詮、こんな男と自分がまともに闘えるはずもなかったのだ。
　愛奈は敗北と絶望に打ちひしがれ、緩慢な動作で立ちあがった。
「着替えてくるから」
　どうしても脱ぐという言葉は使えなかった。しかし、男はどこまでも容赦がなかった。
「今、ここで脱ぐんだ。最初は脱ぐだけで済んでも、いずれはＡＶに行くことになるだろう。たかだか俺たちの前で裸になるのビビッてちゃ、到底あんた、この世界でやってけないぜ」
「―」
　男の声は静かながら、有無を言わせぬ口調だった。愛奈は更なる敗北感に打ちのめされ、唇を噛む。
「お嬢ちゃん、こう見えても、俺たちもなかなか忙しい身でね。いつまでもあんた一人に拘わってるわけにもいかないんだ。やるんなら、さっさとやって終わらせちゃくれねえか」
　揶揄するような響きがあるのは、これまで生意気を言い続けた愛奈への意趣返しなのか。大の男が高校生相手に大人げないことだが、今の愛奈にそれに気づくだけの余裕はなかった。

愛奈は歯を食いしばる。立ちあがると、目を伏せたまま、セーラーの制服のスカーフを緩めた。シュルリと静寂にスカーフが解ける音が妙に響く。
前合わせのスナップボタンを一番上から、ゆっくりと外していく。固唾を呑んで見る男たちの双眸がまるで得物に飛びかかる寸前の獣のように欲情しているのも知らない。
ついに制服の上着がはらりと床に落ちた。制服の下はもうブラだけだ。お気に入りの白いレースのついた清楚なブラジャーに包まれた胸は既に大人の女性のものだった。
「近頃のガキは発育が良いなぁ」
小男が今にも涎を垂らしそうな惚けた表情で愛奈の胸を凝視している。
「さっさとしてくれ」
対する坊主頭は少なくとも小男よりは落ち着いて見えるけれど、やはり、そのサングラスに隠された眼には粘着質な淫らな光を帯びている。
愛奈は震える手を今度はスカートのホックにかけた。これを脱げば、後はブラとお揃いの小さなパンティを履いているだけだ。混乱の気持ちが目尻に涙を押し上げてきたけれど、こんないけ好かないヤツらの前で絶対に涙を見せたりするものかと、最早、なけなしの自尊心だけが今の彼女の折れそうな心を支えていた。
ホックを外そうとしたまさにその瞬間だった。応接室のドアが音を立てて開いた。
「貴様ら、何をしてる！」
坊主頭も身の丈があるが、それよりも更に頭一つ分高い若い男が飛び込んでくる。やや鋭角的な曲線を描く頬の形、意思の強さを感じさせる濃い眉が個性的といえばいえるが、まず今風にいえば、イケメンの部類に入る端正でほどよい甘さが混じった顔立ちだ。
愛奈は幼い頃から、このイケメンの年の離れた従兄が大好きだった。中学生になってからは大好きになった韓流スターのペ・スビンに似ているこの従兄を〝お兄ちゃん〟ではなく〝拓人さん〟と呼ぶようになった。愛奈の自慢の従兄なのだ。
おや、というように坊主頭が片眉を跳ね上げる。
「一体、誰の許可を得て、こんなことをしてるんだ」
拓人はつかつかと大股で近づいてくると、坊主頭の男の胸倉を掴み上げた。
「手を放してくれませんかね」
しかし、坊主頭は依然として落ち着き払っている。
「我々は、こちらのお嬢さんの亡くなられた父上が書いた書類を預かっています。必要なら、今、この場でお見せしますが」
拓人が悔しげな顔で男から手を放した。坊主頭は汚いものにでも触れられたように襟元を払い、咳払いする。横からニキビ面がさっと別の書類を渡した。
「こちらを」
拓人は座りもせず、その書類を受け取った。数枚の書類を難しげな表情で眺めた後、坊主頭に突き返した。
「確かに君の言い分にも一理の正当性はあるようだ」
「ご理解頂けて何よりです」

　拓人は今日も濃紺のビジネスーツでびしっと決めている。
「亡くなった叔父が残した借金はすべて私が払う」
　刹那、流石の坊主頭も眼を見開いたようだった。
「いや、しかし、これだけの」
　相手に皆まで言わせず、拓人は仕立ての良いスーツの上着から名刺を出した。
「僕の言うことが信用できないというのなら、これからすぐに付いてくれば良い。会社の経理担当が今日中には全額耳を揃えて君たちに望み通りの金を進呈するだろう」
　拓人が差し出した名刺には〝アークコーポレーション　代表取締役　平城(ひらき)拓人〟と書いてあった。
「アークコーポレションの社長」
　小男がこれまで以上に惚(ほう)けたような顔で拓人を見、更に傍らの愛奈を見た。拓人は男の不躾な視線から隠すように、さっと自分の上着を脱いで愛奈に羽織らせた。
「失礼ですが、天下に名高いアークの社長があなたのような若造、失敬」
　わざと言い間違えたに違いないのだが、坊主頭は言葉だけは慇懃に言い換えた。
「お若い方だとは迂闊にも知りませんでした」
　態度も物言いもいっそう丁重にはなったものの、男の瞳には拓人をこの場で射殺しかねないほどの物騒な光がある。
「私の親父が十年前にＲ航空の飛行機事故で亡くなりましてね、当時、高校生だった私が名義だけは社長職を受け継いだのです」
「なるほど、当時、あの事故は世間を賑わせましたからな。そうですか、あの痛ましい事故で先代が亡くなられたとは」
　坊主頭が立ちあがった。
「アークの社長が肩代わりを申し出て下さるのなら、間違いはないでしょう。今日のところはこれで失礼します」
　行くぞ、と、小男に声をかけて去っていく。小男はまだ愛奈の方をちらちらと未練がましい眼で見て、坊主頭にこづかれていた。
　パタンとドアが閉まると同時に、愛奈はこれまで張りつめていたものがプツンと音を立てて切れたようだった。身体がふらつき倒れそうになったところを拓人が支えてくれる。
「大丈夫か？」
「拓人さん」
　愛奈は大好きな従兄の腕に抱かれて、甘えるように頬を預けた。従兄の背広から漂っているのは爽やかな柑橘系のコロンの香り、いつも拓人が好んで身につけているのを知っている。
「大好きよ。拓人さんはいつも私が困っていたら、助けにきてくれるんだもの。まるで白馬の王子さまみたい」
「俺が王子さま？」
　拓人は笑いを含んだ声で言う。
　うんと無邪気に頷く愛奈の髪をくしゃりと撫で、拓人はからかうように続けた。

「じゃあ、さしずめ愛奈は姫なのか？　姫は王子さまに助けられて、王子の花嫁になるんだぞ」
「あら、拓人さんは私のお兄さまだもの。兄と妹は結婚できないのよ」
「兄妹(きようだい)じゃない、俺たちは従兄妹（いとこ）だろ」
「そんなことはどうでも良いの。兄王子は妹姫に本当に運命の王子さまが現れるまでずっと見守ってくれるのでしょ」
「随分と都合の良い解釈だな」
　拓人は笑いながら愛奈を抱く腕に力をこめる。
「万が一、そんな男が現れても、俺はお前を渡してなんかやらないからな」
　その時、愛奈は大好きな従兄のその言葉がまさか冗談どころではなかったことをまだ知らずにいた。ある意味、サラ金会社の男たちに付いていった方が幸せだったということすらも。彼女の運命の鍵を新たに握ったのは気高く麗しい天使の仮面を付けた悪魔だった一。

安浦愛奈、十七歳。公立Ｎ高校普通科の三年生で、別段、目立つような女の子ではない。ただ物心ついたときから、二重のはっきりとした黒い瞳が愛らしいと言われることは多かった。顔立ちは世間でいう可愛いの部類には入るだろう。かといって人眼を引く美人ではけしてない。

愛奈の父安浦禎三(ていぞう)と拓人の父平城俊介は血の繋がった兄弟である。禎三は大学卒業後、見合いでアークコーポレーション傘下の中小企業であるＹ＆Ａ企画の社長令嬢と結婚、婿養子に入って安浦姓を名乗るようになった。Ｙ＆Ａ企画は広告代理店で、禎三の代になってからも経営状態は安定していた。

しかし、数年前に請け負ったテレビＣＭの仕事が見事に失敗してしまった。有名化粧品メーカーの春に売り出される新色口紅のコマーシャルに出演するはずの女優がドタキャンしてしまったのである。

ギャラの問題で大揉めに揉めて降板、急遽代理を立てたものの、今度は化粧品メーカーの方が気に入らず、この話は暗礁に乗り上げた。結局、間に入ったＹ＆Ａ企画が大損をすることになってしまった。

その頃から何もかもがうまくいかなくなった。父は懸命に赤字を埋めようとしたものの、やることなすことすべてが裏目に出た。やがて最初はほんの少しだった負債は見る間に膨れ上がり、返済の目処さえつかなくなった。禎三が首を吊って変わり果てた姿となって山中で発見されたのは、つい一週間ほど前のことだ。

今日はその初七日だった。物言わぬ骸となった父と病院の霊安室で対面した後、葬儀を何とか済ませられたのもすべては拓人が側で支えてくれたからだ。高校生の愛奈はただ黙って座っていれば良かった。拓人がすべて采配をふるってくれたからこそ、初七日を無事に迎えられたのだ。

愛奈は今日は高校を早退して、そのまま菩提寺に行って読経をあげて貰って自宅に帰ってきたのだ。拓人は一緒にいてやりたいが、仕事が忙しくて、どうしても抜けられないのだと事前にメールが届いていた。

帰宅早々、お手伝いの美代子さんが慌てて出迎えたのである。

―お嬢さま、どういたしましょう。

聞けば、あの二人組が押しかけてきて応接間に居座っているとのことだった。

しかし、愛奈自身、いつかこんな日が来ることは覚悟していた。既に父が多額の負債を残していることも知っていたし、サラ金業者がこの日に自宅に来るとの連絡も入っていた。

もちろん、葬儀の直後、言いにくそうな様子で父の秘書から負債の件を告げられたときは愕いたし、父を恨みもしたけれど、今更、あがいたところで何になるだろう。大好きだった母を突然の事故で失った小学一年生のときから、愛奈は諦めるということを知った。

人生には時には幾ら懇願しても叶えられない望みがあるのだと。

あの日、母は入学したばかりの愛奈が忘れていった筆箱を学校まで届けにきてくれた。母が事故にあったのはその帰り道だった。トラック運転手の居眠り運転で横断歩道を歩いて渡っていた母は撥ねられた。即死だった。

救急車で搬送された病院で次第に冷たくなる母に取り縋って泣きながら、もし、この世に神さまがいるなら、どうかママを連れていかないでと懸命に祈ったのに、ママは死んだ。

―あたしが忘れものさえしなきゃ、ママは事故に遭うこともなかったんだ。
　その想いは今も愛奈の心から消えたことはない。
　お給料も払えないから、大勢いた使用人もどんどん辞めていって、今では長年勤めてくれた美代子さんが一人だけ。美代子さんは愛奈が生まれる頃から、ここで働いている。今はもう五十歳は過ぎているだろう。母が突如としていなくなってからは、美代子さんの存在は愛奈にとっては心強かった。
　いずれはこの屋敷も手放し、出ていかなければならないことは判っていた。父親の残した借金を娘の自分が払うのは仕方のないことだと理解はしていたけれど、まさか、この身体で払えと言われるのは想像だにしていなかった。
　確かに小説やドラマではよく聞く話である。父親が残した借金を残された娘が支払うために、吉原遊廓に身を沈める悲話は江戸時代では実際に珍しくはなかったという。
　それでは、自分はさしずめ、借金の形に苦界に身を沈めなければならない哀れな娘になるところだった？　危機一髪のところを拓人が助けてくれなければ、江戸時代の遊廓ならぬ現代の苦界に堕ちて、やがては、この世の底の底まで堕ちていく悲哀をこの身で味わうことになったに違いない。
　それを思えば、拓人は一生の恩人だ。
―拓人さんのために何かできることがあれば、私は何だってするんだから。
　この日、愛奈は心に誓った。その〝何か〟が意味するものを、まだ愛奈はまったく掴めていない。でも、拓人がいなければ、これから先の自分はいなかったのだと思えば、何でもできる。このときの愛奈は心底からそう思った。
　いつか拓人にも愛する女性が現れるだろう。自慢の従兄が女性にはモテるのを知らない愛奈ではなかった。ルックスもモデル並のイケメンでしかも優しくて話術も巧み、何もかもが洗練されていて、しかも一流企業の社長ときている。
　拓人ほどの男に想いを寄せられて拒む女はまずいない。いつか従兄が選ぶ素敵な女性を見てみたいと愉しみにしている愛奈だ。
　安心して彼を託せる女性が現れるまでは愛奈が側にいて彼の世話をする。それが、窮地を救ってくれた彼への愛奈ができるせめてもの恩返しだ。拓人が彼にふさわしい女性と結ばれたその後、愛奈はこれからの自分の人生について考えれば良いと思っていた。

Ｗａｔｅｒ　ｍａｒｋ（波紋）

　その朝、愛奈は張り切って早く起きた。会社に出かける拓人のために腕に寄りをかけて弁当を作った。鮭の切り身にほどよく塩を利かせてこんがりと焼き、これはお袋の味の定番の卵焼きは欠かせない。更にひじきと大豆の煮たものやほうれんそうのお浸しと健康と彩りの両方から考え抜いたメニューだ。
　ご飯は父が通勤用に使っていた保温ジャーを持ってきていたので、それに炊きたてを入れた。出来上がった弁当をモノトーンチェックの大きめのバンダナで包み拓人に手渡すと、彼は愕いたように切れ長の眼を見開いた。
「これ、全部、愛奈が作ったの？」
「そう、拓人さんのために色々と考えたの。いつもどうせ外食ばかりなんでしょ」
「まあ、な。夜は確かに接待で外食ばっかだし、接待ない日は家に帰っても独身男の悲しさでメシ作ってくれる嫁さんもいないから、つい面倒になって外で済ませちまうもんな」
　拓人がおどけて肩を竦めて見せる。
　愛奈は頬を膨らませた。
「駄目よ、そんなんじゃ。まだ若いからって油断してたら、三十過ぎで早々と成人病になるんだからね」
「おい、脅かすなよ」
「脅しじゃないわ。今、結構若い世代で成人病にかかってる人が多いんだってよ。拓人さん、何で結婚しないの？　拓人さんほどの男なら、それこそお嫁さんになりたがってる女(ひと)は星の数ほどもいるでしょうに」
　前から気になっていたことをこの際、訊ねてみる。
「俺？　結婚ねぇ」
　拓人は人差し指と親指で顎を掴み、首を傾げた。
「もう二十八なのに、いつまでも独身じゃ、その中にお嫁さんの来手もないまま歳を取るわよ」
「おいおい、お前、勝手に人を爺さんにするなよ」
　もちろん、言葉どおりのことを考えているわけではない。拓人のような素敵な男性なら、四十歳くらいになっても、まだ妻になりたがる女は多いに決まっている。しかし、仕事には熱心なこの男は放っておくと、本当にこのまま独身で一生を終わりそうな気もする。
「中川の伯母さまが零してたわ。拓人さんに幾ら見合いを持ってきても、相手の写真も見ないで片っ端から断ってしまうって」
　中川の伯母というのは、愛奈や拓人の父たちのいちばん上の姉である。旧子爵家という由緒ある家柄に嫁ぎ、夫は今も健在で有名銀行の役員をしている。
　その伯母は三日前の初七日法要にはちゃんと寺に来てくれたが、いつもながら、拓人の結婚についての不満をつらつらと零していた。

「付き合ってる女(ひと)とかいないの？」
　拓人がそうまで頑なに見合いをしないのは、恋人が既にいるからではないかと考えるのが自然だ。今日は少しばかり突っ込んだことを訊いてみようと愛奈は更に追及してみた。
「恋人なんていないさ」
　拓人はネクタイの形を直しながら、長い廊下の曲がり角の壁に付いた鏡を覗き込む。今、二人は玄関までの廊下を歩きながら話しているところだ。
　何しろ、拓人の住まいは半端でなく広い。愛奈が亡くなった父と暮らしていた家もそれなりに大きかったけれど、ここはまさに豪邸と呼ぶにふさわしい家だ。愛奈の暮らしていた屋敷の二倍の敷地はあるだろう。
　拓人はもう十年も前から、この広大な屋敷にたった一人で暮らしているのだった。通いの家政婦と執事はいるものの、彼らは夕方にはそれぞれの住まいへと帰っていく。
「もしかして、他に好きな女性とかいたりして？」
　ほんの思いつきで口にした言葉に、鏡に映った拓人の顔に微妙な変化が兆した。
「何でそんなことを？」
　ややあって、拓人の顔には、もうわずかな動揺は微塵も見られなかった。あれは見間違いだったのだろうか？　愛奈は首を傾げつつ応えた。
「だって、男の人が普通、いつまで経っても結婚しないなんて、大抵は恋人だとか好きな女だとかがいるからじゃない？」
　それは女性側からしても同じだろう。誰だって特定の相手が心に棲んでいれば、なかなか結婚や見合いをしようという気にはならないものだ。
　けれど、ならば何故、拓人がその意中の相手にアプローチをかけないのかが判らない。拓人に声をかけられれば、どんな女だって、その気になるだろうのに。
「好きな女がいるのなら、思い切って告白しちゃえば良いのに。拓人さんに告白されてフる女なんてこの世にはいないよ」
　思ったことを言えば、拓人が吹き出した。
「嬉しい言葉だが、それはお前の買い被りというものだ。俺はそんなにたいした男じゃない。どこにでもいるごく普通の男だよ」
「あら、拓人さんはそうそうどこにでもいるような男じゃないわよ。何たって、私の自慢の従兄ですもの」
「それよりも、愛奈。今日は試験だろ。呑気に俺のことを心配してる場合ではないんじゃないのか。昨夜、教えた二次関数のところ、ちゃんと理解できたのか？」
　言われて、愛奈は初めて今日が実力テストだったことを思い出す。昨夜も数学の判らないところを拓人に深夜まで教えて貰ったのだ。有名私大の経済学部を優秀な成績で卒業した拓人はもちろん頭脳も明晰である。教え方も上手だから、下手な塾より家庭教師より、拓人に教えて貰う方がよほどよく理解できた。
「ごめんなさい。まだちょっと判らないところがあるの」
　愛奈がしゅんとして言うのに、拓人は破顔した。

「しょうがないヤツだな。今はもう時間ないから、また帰ったら教えてやるから」
「お願いね」
　両手を合わせて可愛らしくお願いする愛奈を横目で見て、拓人がふと思いついたように言う。
「ところでさ、お前は誰か付き合ってる男とかはいないの？」
　意外な問いに、愛奈は眼を瞠った。まさか拓人の口から出るとは考えてもいなかった科白だったから。

「私？　そんな男はいないよ。あ、でも」
　言いかけた愛奈に拓人がくるりと振り向いた。
「なに？」
「あのさ、変なこと訊くかもしれないけど、男の子って、どんな女のタイプが普通は好みなの？」
「男の好みか。まあ、それぞれだと思うが、一般的となれば、可愛くて美人で、性格が良い子、素直な子。これで家庭的となれば更に良いかな。でも、何で？」
　拓人が物問いたげな視線をくれる。愛奈はへへと頭をかいた。
「あのねー、ちょっと気になるの男の子がいるの。隣のクラスなんだけど、サッカー部のエースなんだ。こうね、ゴール決めるときなんて、もう超カッコ良くてさ、狙ってる子が多いんだ」
「超カッコ良い、ねえ」
　拓人が少し呆れ気味な顔で見つめているのに気づき、愛奈は恥ずかしさに居たたまれなくなった。
「まだまだ先だけど、来年のバレンタインは勇気を振り絞って告白しちゃおうかなー、なんて。どうせ私なんかその他大勢の一人だから、反町(そりまち)君の眼にも入ってないだろうけどね」
　拓人が優しい眼で愛奈を見た。
「その若さが俺には羨ましいね。俺なんて、いつまでも悶々と一人で抱え続けてるだけだから」
　愛奈はやっぱりと、拓人を軽く睨んだ。
「拓人さん、やっぱり好きな女がいるんだ？」
「さあ、どうだかね」
　拓人が話を曖昧にしようとするので、愛奈は夢中で続けた。
「思い切って告白しちゃえば良いのに。何度も言うけど、拓人さんみたいな素敵な男に告白されて、断る女なんていないよ」
「なら、お前は？」
　え、と、これまた意外な言葉に愛奈は弾かれたように顔を上げる。
「どういう意味？」
「俺に告白されたら、お前は断らないのか？」
　愛奈は笑った。
「また冗談ばっかり。私は拓人さんの妹分なんだから。恋愛対象外でしょ」
「一俺は本気だよ」
　しかし、その言葉はあまりにもか細すぎて、愛奈には届かなかった。
「おっ、やばい。こいつは出社時間には遅れるな」
　拓人が腕時計を覗き込んで呻いた。愛奈も同様に声を上げた。
「ホントだ。私もテストだっていうのに、遅れちゃう。ごめんね。私が余計な話をしたばかっかりに遅刻だね」
「いや、色々と興味深い話が聞けて良かったよ」
「興味深い話？」

「愛奈の好きな男とか」
　ああ、と、愛奈は深く考えもせず笑って頷いた。
「運転手さんが待ちくたびれてるんじゃない？」
「本当だな、また瀬道(せどう)に説教されるな、こりゃ」
　拓人は参ったと言いたげに頭をかいた。毎朝、家の前には高級黒塗車が横付けされる。アームコーポレーションの社長専用車で、もちろん専属の運転手もついている。瀬道というのは秘書課の課長と社長の第一秘書を兼ねている瀬道浩太郎だ。拓人よりは数歳年長の有能な彼の懐刀でもある。
　木目調の美しい廊下から御影石が敷き詰められた玄関へと降りる拓人に、愛奈は靴べらを差し出す。
「サンキュ、気が利くな」
　一瞬、拓人が眼を細めて愛奈を見つめた。
「じゃ、お前も気を付けて学校に行くんだぞ」
　拓人はいつになく慌てた様子で重厚なマホガニー材のドアを開けて出ていこうとする。その背中に愛奈は慌てて声をかけた。
「あ、拓人さん」
　急いでいる彼には申し訳ないけれど、どうしても頼んでおかなければならないことがあった。
「来週の水曜日の三者懇談、大丈夫よね？」
　既に何度かは確認しているが、クラス担任が決めた日時に都合がつかない者は今日までに申し出ることになっている。
　拓人は屈託ない笑顔で頷いた。
「ああ、大丈夫だよ。俺はお前の保護者代わりだからな」
「行ってらっしゃい」
　愛奈の見送りにとびきりの笑顔で応え、拓人は今度こそ出ていった。
　パタンと眼前でドアが閉まった。愛奈は自分も二階に与えられた部屋へと引き返した。改めて眺めると、ゆうに八畳はあるフローリングの室内が眼に入る。
　アイボリーに淡いピンクの薔薇が散った壁、出窓からは朝の澄んだ陽光が惜しげもなく降り注ぎ、レースのカーテンがかすかに揺れている。天蓋のついたベッドはやはり淡いピンクを基調としており、シンプルなデスクとチェア、更には可愛らしいドレッサーがそれぞれ控えめに配置されている。
　デスクの上にはスタイリッシュなノートパソコンまで用意されていて、至れり尽くせりだ。これらはすべて拓人が愛奈のために用意してくれていたものだった。まるでドラマに出てくるヒロインの私室そのものを再現したかのようなオシャレな空間。
　それまでが割と地味な普通の暮らしだったせいか、こういういかにも女の子然とした部屋に実はなかなか馴染めない愛奈である。しかし、良かれと思ってわざわざ用意してくれたものに対して不満を唱えられるはずはない。
　それ以前に、拓人には父の多額の負債を肩代わりして貰ったという負い目がある。

拓人の部屋は同じ二階にあるが、何しろ二階だけでも現在は使用されていない部屋が十部屋近くはある。拓人の部屋はここからは長い廊下を歩いて先にあるらしいが、愛奈はまだ行ったことはない。幾ら従兄妹はいえ、未婚の若い女性が独身の拓人の私室を訪れるのはマナー違反だと思うからだ。

その点、愛奈は若い女の子にしては、貞操観念がしっかりしているというか、けじめはつける性格だ。父の禎三がそういう躾けに関してはきっちりしたところがある人だったからかもしれない。

愛奈はもう一度、オシャレな自分の部屋を振り返ってから小さな溜息をついてドアを閉めた。

更にそれから数日が経った。その日は最悪の一日だった。午後五時、愛奈は重い足取りで新しく彼女の〝家〟となった住まいの前に辿り着いた。以前、父と暮らしていた家から高校までは自転車で通っていたが、今はかなり遠くなったので、電車通学になった。最寄りの駅から電車で三十分はかかる。

もちろん、その程度のことで文句を言うつもりはないし、些細なことだ。愛奈をして最低の一日と言わしめたのは、例の片想いしていた男の子ー反町君が転校すると聞いたからだった。

しかも親友の満奈実から聞いた話によれば、

ー反町君ってさ、愛奈のことを好きだったらしいよ。

というのだ。

もちろん、あくまでも噂の域を出ないのだけれど、当の愛奈が知らないだけで、三年女子の間では結構有名な話だったと聞いて、更にショックを受けた愛奈だった。

ー転校って、そんな話は全然聞いてなかったのに。

満奈実を問い詰めても仕方ない話なのは判っていたが、どうしても訊かずにはいられなかった。すると、どこでどうやって情報を得てくるのか、学校のことなら何でも情報に明るい満奈実はこんなことを教えてくれた。

ー何でも突然、決まった話らしいよ。反町君って、お父さんと二人暮らしでしょ。お母さんとお父さんは彼が小さい頃に離婚したっていうし、それで、そのお父さんが急に北海道へ転勤が決まったとかで、反町君もそれについて向こうへ行くことになったみたい。

ー北海道に行くの？

愛奈は悲鳴のような声を上げてしまった。すぐ近くならまだ望みは繋げるけれど、北海道なんて、あまりにも遠すぎる。もし、反町君が本当に自分のことを好きでいてくれるというのなら一、このまま想いを告げずに別れてしまうのは、あまりにも切なすぎる。

だが、隣の三組に逢いにいっても、反町君はもう学校には来ていないようで、昨日、彼自身がロッカーに置いてあった荷物などはすべて取りに来て、クラスメートや部活の友達、先生たちにも挨拶を済ませていったという。

ーそんなのって、あんまりじゃない？

別に彼が愛奈を好きだというのはあくまでも噂なのだし、反町君が愛奈に別れを告げてくれなかったということで口惜しいわけではない。ただ、彼に好きだとこの想いを告げもしないで、これきりになってしまうのが嫌だった。

せめてずっと逢えなくなる前に、想いだけは打ち明けたい。その一心だ。

だが、反町君はもう二度と学校へは来ない。ーとすると、直接、彼を訪ねるしかないのだが、彼はサッカー部の親しい同級生たちにも自宅の所在を明らかにしていなかった。そこでも満奈実が大いに協力してくれた。

ーここがどうやら反町君の自宅住所らしいよ。でも、これって教えてくれた子からも絶対に他に洩らさないでくれって言われたし、私が情報元だってバラさないでよ？　もし約束を破ったら、小学生以来のダチの愛奈でも絶好だよ。

とまで言い渡されて、小さな走り書きのメモを貰った。

何でも、反町君がサッカー部の主将をしていて、その一番の親友が副主将の同学年の子だった。反町君はその子だけには自宅の住所を教えていたそうで、満奈実はそこから情報を引き出したのである。
反町君が住んでいるのはＳ町、つまり、現在、愛奈が拓人と暮らしているＩ町からＮ町の高校まで電車で通っている私鉄沿線の途中の駅に近かった。それなら途中下車すれば、探せないこともないだろう。幸いにも、住所はその私鉄のＳ駅に近かった。
―よし、何が何でも、絶対に逢いにいくんだから。
愛奈は心に決めた。
ガッツポーズで呟いたまさにその瞬間、背後でカツカツと靴音が響いた。明らかに女性用のヒールらしいその音に、愛奈は振り返る。
眼前に佇んでいたのはスレンダーな美女だ。身長は一六五㎝ほど、これはバスト八十八、ウエスト五十八、ヒップが九十くらい？　などとつい余計なことまで考えてしまうのは相手がこの辺りではというより、これまでの人生ではついぞ見かけない美人だったからだ。細身なのに出るどころは出ているし、引っ込んでいるところは引っ込んでいる。まさにモデル体型、おまけに顔も藤原紀香にそっくりである。
「凄いゴージャス美女だわ」
呟くまもなく、そのゴージャス美女は愛奈の前に立った。両腕を組んで脚を開いて仁王立ちになるという、いささか外見にはふさわしからぬポーズに、愛奈は呆気に取られた。
この屋敷の門から広大な庭園を通り抜けてここ玄関に至るまでには、十分程度はかかるはずだ。なのに、至近距離に来るまで足音に気づかなかったのは、やはり反町君のことで愛奈の頭が一杯だったからなのか。それとも、女が猫のように足音を忍ばせていたからなのか？

　確かに美しくはあるけれど、どこなく外見は猫を思わせるイメージだ。いや、猫というよりは豹？　しなやかな肢体を持つ妖しい色香を放つ女豹が今、愛奈をきついまなざしで見据えている。
　美しいが険のある眼許はアイラインをくっきりと引きすぎているがために、余計にきつい印象を与えてしまう。
「あ、あの？」
　愛奈は戸惑いを隠せなかった。
　女はつかつかと歩み寄ってくると、また仁王立ちになった。ふいに彼女が手を伸ばし、愛奈の顎をほっそりとした指先で掴んだ。いささか人工的すぎるほどに手入れの行き届いた爪先は毒々しすぎるバイオレットに染まっている。
　女は愛奈の顎を持ち上げさせ、しげしげと眺め回す。そんな不躾な視線に晒されていると、まるで自分が棚の上の商品にでもなったような気分だ。幾ら年上だからといって、初対面の相手にここまでされるいわれはない。
　愛奈は鞄を提げていない方の手で、女の手をさっと払いのけた。
「あなたは誰ですか？」
　と、女がフと含み笑う。これもどうやら馬鹿にされているような、到底、好意的な視線とは思えず、愛奈もまた負けずに女をにらみ返した。
　しばらく二人の女はそのまま対峙していたが、やがて、女の方が視線を逸らした。女はあらぬ方を見つめていたかと思うと、肩を揺らして笑い出した。
一何なの、この女。
　愛奈があまりのことに物も言えないでいると、女豹を思わせる女はひとしきり笑い続けてから、ふと笑いを納めた。いきなり真顔になってこちらを見つめる女を、愛奈は思いきり不審者を見る眼で見つめてやった。
「なかなかのコよね」
「は？」
「このあたしを見て眼を背けずににらみ返して来るなんて、あんた、良い度胸をしてるわね。あんた、歳は幾つなの？」
　愛奈はキュッと唇を引き結んだ。
「あなたに応える筋合いはありませんけど」
　すると、女はまた何がおかしいのか、声を上げて笑う。なので、愛奈は次の瞬間、自分に起きたことが信じられなかった。
　パァーン、乾いた音が鳴り響き、愛奈は右頬を押さえて茫然と女を見つめた。
「あんたね、まだ子どもの癖に、このお涼姐さんを舐めるんじゃないわよ？」
「一何で、こんなことをするんですか？　舐めるも何も、私はあなたのことなんて全然知らないのに」
　見も知らぬ女にいきなり敵意を剥き出しにされ、挙げ句には頬を打たれるという信じられない出来事に、愛奈はかなりの打撃を受けていた。あまりの悔しさに、涙が溢れそうになっている。

「拓人に伝えといて。これしきの手切れ金と〝別れよう〟のメールだけで終わりにしようなんて、虫が良すぎるんじゃないかって。あたしたちの二年はそんな薄っぺらなものだったのかしらとね」
　〝ああ、これ〟と、女は忘れ物を思い出したかのようにコーチのバッグからおもむろに小さな紙片を取り出した。
「もし、拓人と別れる気になって行くところがなくなったら、ここに来ると良いわ。あたしの店だから。あなたなら、すぐに良いお客が付いてナンバーワンにもなれる。案外、ここにいるよりも良い暮らしができるかもよ。男たちを手玉に取りながら、夜毎飛び回る綺麗な蝶になるの。マ、気が向いたら電話して」
　言うだけ言うと、女はさっさと背を向けた。またカツカツと小気味良いヒールの音を響かせて去っていく。コーチのショルダーバッグに、シャネルのワンピース、どう見ても十数㎝はあるかと思われるピンヒールのパンプス、果てはネイルからルージュに至るメイクまで全身紫で統一している。
　腰まで届くロングヘアはシャギーの入った緩やかなウエーブ、どこを取っても隙のないいでたちはまさに〝ゴージャス〟の形容がふさわしい。流石に妻として拓人の隣に並ぶにふさわしいかどうかは疑問だけれど、恋人としてなら、美男美女、これほど似合いの女はいないだろう。
　大体、紫という色は人を選ぶものである。例えば、まだ成長途上の愛奈には紫という色は絶対に着こなせない。だが、あの女豹のような女はその紫を見事に自分の色にしてしまっている。
　女に打たれた頬には、まだかすかに痛みとひりつきが残っている。そっとその部分を押さえながら、愛奈は女から渡された小さな紙切れをぼんやりと眺めた。小さな長方形の紙もご丁寧に薄紫で、飾り文字が印刷されている。〝スナック　パープル・ローズ　店長　佐伯涼子〟、その文字を眼で追いながら、愛奈は先刻の涼子が自分に向けた視線を思い出していた。
　あの瞳を自分はいつかどこかで見たことがあると思った。あれはいつだったろう。そう、確かまだ小学生になる前、幼稚園の年長組のときのことだ。よく遊びにいく小さな公園に、野良猫の親子が住み着いていた。愛奈は子猫が可愛くて、幼稚園の給食の牛乳や残りのおかずを持っていっては猫に与えていた。

しかし、親猫はいつも警戒心剥き出しで、子猫を守ろうとするかのように歯を剥いて不気味な唸り声を聞かせていた。
　そんなある日、いつものようにミルクとスーパーのレジ袋に入れたおかずを持っていったら、親猫は常以上に気を荒立てていたらしく、近づいただけで毛を逆立てて威嚇してきた。どうやら今日は先客がいたようで、子猫は既に誰かが持ってきたらしい紙製のトレーに入ったミルクを美味しそうにペロペロと舐めていた。
―大丈夫、私は何もしないわ。いつものようにほら、食べ物を持ってきてあげただけなの。
　愛奈は気を立てている親猫を安心させるように優しく言い聞かせながら近寄っていったけれど、親猫はますます近づいてくる愛奈を警戒し唸った。
　あのときはまだ幼すぎて理解できなかったけれど、親猫は子猫を精一杯守ろうとしていたのだろう。もしかしたら、子猫が呑んでいたミルクを愛奈が奪うとすら思ったのかもしれない。
　先刻の女の瞳は、あのときの親猫とよく似ている。まるで自分のものを奪っていこうとするものを全身全霊をかけて拒もうとするかのように。
―あたしたちの二年はそんな薄っぺらなものだったのかしらとね。
　あの言葉からも、涼子という女が拓人と深い仲にあったのは一目瞭然だ。深い仲、恐らく男女の仲なのだろうことは、十七歳の愛奈にも容易に想像がつく。それで、何が原因かは判らないが、拓人が突然、別れ話を切り出した。
　そのため、涼子が激怒してここまで乗り込んできたと考えるのが妥当だろう。だが、何故、拓人の恋人だか愛人だかの怒りが愛奈に向けられるのかが解せない。
　拓人が涼子と別離を決めた理由を知る由もないけれど、そこに愛奈の存在はまったく関係ないことである。なのに、いきなり現れて頬を張られるなんて、割に合わなさすぎる話である。
　ああ、今日は本当に最低の日だわ。
　愛奈は心でぼやきながら、大きな溜息をつくと、涼子が残していった名刺を二つに破った。
　拓人は大切な従兄だし、恩人でもあるが、その私生活にまで干渉する気はないし、また、するべきではない。ましてや、恋人との別れ話で揉めているただ中に首を突っ込む気は毛頭なかった。
　それに、愛奈は愛奈で反町君に会えなくなる前に告白しようと決意した矢先なのだ。到底、他人の色恋どころではないというのが実情だった。
　涼子の仕打ちを拓人に報告することも考えたけれど、それではまるで告げ口をしているようだ。自分は何の関係もない話なのだから、ここは見て見ないふりを通した方が良いと愛奈は拓人には敢えて告げなかった。
　だが、この出来事は愛奈の心になかなか消えない波紋を巻き起こした。
　翌週の水曜日は高校の三者面談になっていた。予め約束してあったとおり、拓人はその日は仕事を早めに切り上げて帰ってきてくれた。愛奈の方は午前中だけで授業が終わったので、一旦帰宅していたから、拓人と二人、彼の運転するポルシェで高校に向かった。
「何か恥ずかしいよ。外車で高校に行くなんて」
　国内でも名の知られている一流企業の社長の感覚と一女子高生のそれは大幅にかけ離れている

らしい。拓人はポルシェしか持ってないので、それなら電車で行こうと提案しても、時間の無駄だと取り合ってくれなかった。
「そうか？　別に盗んできた車じゃないんだし、構わないだろ」
　と、当の拓人はまったく気にしていない。
ー私が気にするんですってば。
　と訴えたいところだが、これ以上、言っても仕方がないと悟り諦めた。
　ポルシェがごく普通の乗り物という感覚からして、拓人が高校生で社長職を継いでから、普通の十代の若者が身を置く世界で生きてきたわけではないことを示している。
　十代で継いだのは名前だけの社長職だとサラ金業者たちには謙遜したが、それはまったく事実に相違することを愛奈は知っていた。拓人の代になってから、アークコーポレーションは更に飛躍的な発展を遂げている。
　ネット社会を大いに利用した彼の経営戦略は見事に功を奏し、アークの傘下企業は今や国内外に十数社の規模を誇っている。そのどれもがかなりの成功をおさめていた。
　それでも、愛奈は拓人に億という名の付く借金を肩代わりして貰ったことを忘れたわけではなかった。
「拓人さん、今度のこと、色々とありがとう」
「ん？」
　拓人が何だ？　というようにちらりとこちらを見た。言いにくいけれど、まだ、お礼をちゃんと言ってない。ここはやはりきちんと言うべきだ。愛奈はひと息に言った。
「パパが残した借金のこと、拓人さんが全部払ってくれて。幾らアークが大きな会社だっていっても、億単位の出費は経営にも響いたはずだし、本当にごめんなさい。そして、ありがとう。私、これから何年かかっても、少しずつでも拓人さんが払ってくれたお金は返していくつもりだから。多分、一生かかっても、返しきれないだろうとは思うけど、その分は、私にできることなら何でもするということで大目に見て貰うしかないみたい」
「お前が気にすることじゃないさ」
　拓人は短く応えただけで、意識は運転に向けているようである。
「それに、また余計なお金を使わせてしまうことになるかもしれないし」
「まだ、どこかに借金が残っているのか？」
「ううん」
　愛奈は小さく首を振り、うつむいた。わずかな逡巡を見せた後、拓人を見上げる。借金を肩代わりして貰った上に、居候させて貰っているのに、これ以上の我が儘は言えない。
　でも、どうしてもこれだけは果たしたい夢があった。
「私、将来は幼稚園の先生になりたい。子どもが好きだから、たくさんの子どもたちに囲まれて、一緒に遊んだりーそんな仕事がしてみたいって、ずっと思ってたんだ」
「へえ、意外だな、愛奈は子どもが好きなんだ」
　何故か嬉しげに笑う拓人に、愛奈は頷いた。
「意外っていう言い方が引っかかるけど、まあ、良いわ。そうなの、私って、一人っ子だった

でしょう、だから、子どもがたくさんいる環境にどうしても憧れちゃうのよねー」
「なら、お前が早く結婚すれば良い。そうすれば、子どももすぐにできるぞ？」
　拓人は相変わらず前を向いて慣れた様子でハンドルを切り続けている。その横顔は特に何の感情も感じられない。
「そういうのじゃないのよ。それはもちろん、いずれは結婚だってしたい、自分の子どもだって欲しいけど、まだ十七歳なのよ。そんなのはまだまだ先のことだし、今はとにかく幼稚園の先生になって、そういう形で子どもたちと拘わっていきたいの」
　しばらく静寂があった。信号の手前で車が一時停止する。拓人がポツリと呟いた。
「それで？」
　話の続きを促され、愛奈は続けた。
「大学に行きたいの。Ｎ大の短大部に幼児教育科があるから、今はそこを目標にしようかなと思ってる」
　拓人はハンドルを握りしめたまま、ずっと前方を見つめている。その沈黙は愛奈を息苦しくさせた。
　大好きな従兄と一緒にいて、こんなに気詰まりを感じたのは初めてのことだ。
「でも、別に拓人さんに学費を出して貰おうなんて考えるわけじゃないのよ。基本はちゃんとバイトとかして、できるだけ自分でやっていくつもりでいるの。でも、最初の入学金とかはどうしても拓人さんに借りなきゃ駄目かもしれない。そのときはまた無理をお願いすることになるけど」
「俺は別にお前に金を貸した憶えはないし、これからも貸すつもりはないよ」
「拓人さんー」
　言葉の意味を図りかね、愛奈は視線をさまよわせる。信号が再び蒼になり、拓人は車を発進させた。
「俺らの間で金を借りるも返すもないだろう？　そんな水くさいことを言うな」
「ありがとう」
　愛奈は熱いものが込み上げ、眼を潤ませた。
「馬鹿だな、泣かなくても良いだろ」
　拓人は洟を啜る愛奈にハンカチを差し出してくれた。
　拓人さんはやっぱり優しい私の大好きなお兄ちゃんだわ。愛奈は涙の浮かんだ瞳で拓人に微笑み返した。

Ｃｏｎｆｕｓｉｏｎ（混乱）

拓人の運転するポルシェがＮ高校前の校門から校庭に入る。校庭には、まだ校庭に居残っている生徒や面談に来た保護者の姿がちらほら見えた。その皆が一様に見るともなしにポルシェを見ている。
やはり電車で来れば良かったと、愛奈は心で呟いた。だが、拓人は頓着しない様子で駐車場スペースに車を停車させた。
「行くぞ」
皆の視線が気恥ずかしくてなかなか車から降りられない愛奈のために、拓人が先に降りて外側から助手席のドアを開けてくれた。
今日の拓人は会社から直帰したので、いつもの仕立ての良いビジネススーツだ。ペ・スビン張りの端正で甘い風貌に品の良いスーツとくれば、これはもう女子高生の注目を浴びないはずはない。案の定、車から降りた拓人を見た数人の一年生らしき女の子たちが興奮した様子で彼を見ては何やら声高に囁き合っている。
―ああ、拓人さんが一人いるだけで目立っちゃうのに、こんな外車でいきなり乗り付けたら、余計に悪目立ちするのは想像がついてたはずなのに。
しかも、そのイケメンがさっと外側からドアを開けてくれて、愛奈は車から降りるわけである。これまた公立高校ではついぞお眼にかかれない異様な光景ではある。
恥ずかしいったら、ないわ。愛奈は頬が熱くなり、あまりの恥ずかしさにうつむき加減に歩いた。
しかし、ご当人の拓人はそういう女子の熱い視線を浴びるのは慣れているのだろう。別段、周囲を気にすることもなく堂々としたものだ。Ｎ高校は公立で、歴史も古いが、二つある校舎は数年前に新築したばかりで、まだ見た目も新しく近代的だ。
拓人は物珍しげに周囲を見回している。彼は地元の名門私立大の附属高校を卒業しているから、こういった公立高校の雰囲気は知らないのだろう。
「愛奈の教室はどこ？」
「後ろのＢ棟の四階よ」
愛奈は拓人の方は見ないで口早に応えた。
拓人は訝しげに眉を寄せている。
「どうした？　顔が紅いぞ。熱でもあるのか？」
いきなり手を伸ばして頬に触れる。その刹那、少し前方でキャッーと歓声が上がった。愛奈が恐る恐る声のした方角を見やると、先刻の一年生女子たちがまだ同じ場所にいて、愛奈たちの方を指さして囁き交わしていた。
―うー、何よ、あの子たち。見せ物じゃないだから、さっさとどこかに行きなさいっていうの。
「ねえ、拓人さん。早く行きましょう」

愛奈は拓人の腕に自分の腕を絡め、引っ張るようにして歩き出した。また前方でキャーと歓声が上がったが、もうそちらは見ないで全速力で歩く。とにかく物見高い野次馬の眼から一刻も早く逃れたい一心だ。
だが、その読みは甘すぎた。校内にもまだ当然ながら生徒は残っている。しかも、今日は三年生の三者面談の日だから、保護者までいる。拓人と並んだ愛奈を物珍しげに見送るのは何も生徒だけではなく、保護者も似たようなものだった。
暦は既に六月に入っている。それでなくても日中はもう初夏並みの陽気だから、四階まで上がりきる頃にはもう汗だくになっていた。
拓人の家で暮らすようになった頃はまだ冬服だったけれど、もちろん今は夏服だ。N高は基本、女子は夏も冬もセーラー服である。冬は紺色でスカーフは白、夏は白で生地も薄手だ。スカーフの色は鮮やかな臙脂色になる。
どちらも女子には可愛いと人気があり、愛奈も好きなデザインだ。四階の隅っこの教室の前まで辿り着いたときには、全身に玉の汗が浮いていた。それはもちろん拓人も同じだろう。これからの夏場にはスーツはかなり暑そうである。
「お前、ちょっと気を付けた方が良いぞ」
拓人が小声で耳打ちするので、愛奈は小首を傾げた。
「なに？　どうかした」
「汗をかいたら、制服から下着の線が透けて丸見えだ。こういうのって凄く色っぽいけど、俺はお前のそういうのを他の男には見せたくないからな。ブラだけじゃなくて、ちゃんとキャミソールとかスリップとか重ねて着てくれよ」
言い終わらない中に、背中のブラを止めているホックの辺りを指でつうっと撫でられた。
「やだ、何するの？」
愛奈は振り向き、非難を込めて拓人を見た。
「なかなか男には良い眺めだけどな」
拓人が片眼を瞑って見せるので、愛奈は〝知らない〟とプイとそっぽを向いた。拓人が変なことを言うものだから、それまで気にしたこともなかったことが妙に気になり始めた。
早く汗で濡れた制服が乾いてくれないかと気を揉んでいる中に、前の面談者の母子が出てきた。クラスの女子の中でも割と仲の良い女の子だ。
「バーイ、愛奈」
言いかけたその子が傍らの拓人を見て、眼を丸くする。
―このイケメン、どこから降って湧いてきたの？
その子のショートヘアがよく似合う丸い顔には、もろにそう書いてある。もちろん高三ともなれば、そんなことを口にしないだけの分別はある。
「そちらはお兄さん？」
と、淑やかに訊ねてきた。

「うん、、まあ、そんなところ。従兄なの」
ーなーに、こんな素敵な従兄がいたなんて知らなかったわよ。明日、ちゃんと話しなさいよ。
ー判った。判った。
　無言のやりとりを交わし、愛奈は拓人とともに教室に入った。
「今日はご苦労さまです。担任の大木と申します」
　大木亮先生はまだ三十歳になったばかりの英語の先生である。去年、初めての子どもが生まれたところで、授業中にはしばしば脱線して話が可愛い盛りの我が子になってしまう。
　けしてイケメンというタイプではないが、教え方も上手いし、相談にも親身になって乗ってくれると生徒たちの間でも人気があった。
「こちらこそ、愛奈がいつもお世話になっています」
　拓人は軽く頭を下げ、用意された椅子に腰掛けた。生徒用の椅子は長身の彼が座ると、長すぎる脚がいささか窮屈そうである。
　愛奈も拓人の隣の椅子に並んで座る。大木先生は机を挟んで向かい側に座った。
「愛奈さんのお父さんがお亡くなりになったたことについては、本当に残念なことでした。失礼ですが、そちらさまは愛奈さんとはどういうご関係でしょうか？」
　もちろん、大木先生は父の葬儀には参列してくれた。学校の方にも一応、保護者が変わることは届けてはおいたのだが、確認の意味もあるのだろう。
　拓人は頷き淀みなく述べた。
「私は愛奈の従兄になります。愛奈の父と私の父が兄弟だったもので、身寄りのない彼女を私が引き取りました」
「そうですか、愛奈さんに頼もしい従兄がいて下さって良かった。それでは早速、本題に移りますが、愛奈さんはＮ短大の幼児教育学科を志望されています。今の成績では特別推薦枠、つまり特待生待遇の受験でも十分合格できると思いますよ」
　その言葉に、愛奈は眼を輝かせた。
「本当ですか、先生。特別推薦枠で行けそう？」
「うん、安浦は頑張ってるからなぁ。このままの成績を維持できれば、今年の十二月早々の特別推薦枠で受験してみれば良いと思う」
　大木先生の頼もしい言葉に、愛奈は満面の笑みを浮かべて拓人を見た。
「特別推薦っていうのは、小論文と面接だけの簡単なテストで良いの。でも、これで合格するには校内でもトップクラスにいないと駄目なのに、嬉しい！　特待生待遇になるから、入学金も全額免除されるのよ」
　実はこれが愛奈にとっては一番嬉しいことだ。入学金が免除されれば、かなりの負担が軽減される。もしかしたら拓人にこれ以上無理を言わなくても、自分で何とかできるかもしれない。
「先生、私、頑張って十二月の特別推薦入試を受けます」
　愛奈が揚々と宣言したそのときだった。思わぬ横槍が入った。
「待って下さい」
　大木先生と愛奈は一斉に拓人を見た。

「愛奈は大学には行きません」
　その刹那、愛奈の大きな瞳が一杯に見開かれた。
「拓人さん、何言ってるの？」
　だが、拓人は愛奈の方は見ないで大木先生の方を真っすぐに見つめている。
「彼女は高校卒業後は家庭に入る予定です。ですから、大学には行きません」
　もう一度、愛奈に言い聞かせるように繰り返した。
「ちょっ、止めて。私はそんな話を聞いたこともないし、家庭に入るつもりなんてないもの」
　愛奈が拓人にムキになって言うのを心配そうに眺めやり、大木先生は拓人に問う。
「しかし、私はそういう話を本人からも聞いておりませんし、亡くなられたお父さんからもこれまでの担任には愛奈さんは大学に行くということでお話を伺っていると思いますが」
　大木先生は手許の資料を拓人に指し示した。
「これが一、二年の進路希望調査票です。一、二年時の三者面談はこの調査票を元に行われているはずなので、これが亡くなられた親御さんも納得されていた進路だと思いますが」
　調査票にはもちろん〝N大短大部幼児教育学科〟と愛奈の字で記入されている。父の印鑑もあった。
「これまでの進路はそうだったかもしれません。ですが、今の彼女の保護者はこの私です。彼女の身柄を預かる以上、決定権を持つのは当然のことだと思いますが」
　悪びれもせずに言う拓人に、大木先生が息を呑む。愛奈は拓人の袖を引いた。
「拓人さん、どうしたの？　何で、そんなことを言うのよ」
「ちなみに卒業後、家庭に入るというのは、どういうことでしょうか？　具体的に言うと、自宅で家事でもするということですか」
　大木先生の控えめな問いに、拓人は簡潔明瞭に応えた。
「彼女は僕の妻になります。だから、そういう言い方をしました」
「ー」
　流石に快活な大木先生も顔色を変えた。
「妻、まだ彼女は高校生ですよ」
「もちろん、卒業までは待ちます。それから後は、彼女がどうしようと、あなたには関係はないのでは？」
「！」
　大木先生は自らの感情を鎮めるかのように一旦うつむき、それからすぐに顔を上げた。
「私は彼女の担任教師です。確かに卒業までの縁かもしれませんが、だからこそ、卒業後の進路まで責任をもって見届ける必要があると考えています。あなた方が愛し合っていて、きちんと話し合った上で結婚されるというのなら、もちろん私は心から祝福できます。でも、どう考えても、今の段階で彼女がこの話に納得しているようには見えない。そういう状況で、あなたは大学に行きたいという彼女に行かせないと言い、妻にすると言う。私には納得の行きかねる決定です」
　大木先生の言い分は当然のことだ。しかし、拓人は首を振り、立ちあがった。
「別に、あなたに認めて貰おうとは思っていませんよ、先生。これは僕たちの問題ですから。

愛奈、帰るぞ」
　最後の科白は愛奈に向けられたものであることは判った。愛奈は慌てて立ちあがりながら、大木先生に言った。
「先生、何かの誤解か勘違いだと思うので、また明日、お話しさせて下さい。これから従兄とよく話し合ってみますから」

「しかし、安浦」
　大木先生は既に拓人が教室を出ていったのを確かめてから小声で言った。
「相手は幾ら従兄はいえ、若い男だぞ？　あんなことを言っている以上、こんな言い方はあけすけかもしれないが、彼が安浦に手を出さないとは限らない。どこか別に身を寄せる場所、親戚とかはないのか？」
　愛奈は微笑んだ。
「先生、ありがとう。でも、大丈夫、拓人さんはそんな男じゃないの。きっと何か理由があって、あんなことを言ったんだと思うから、ちゃんと話し合えば判ってくれると思います。だって、拓人さんのところで暮らすようになってもう半月近くになるだもの。これまで何もなかったんだから、大丈夫よ、先生」
　さよならと、愛奈は屈託ない笑顔で大木先生に手を振って教室から出た。
　だが一、大木先生は深刻な表情で考え込んでいた。

　学校の帰り道、二人はフレンチレストランで少し早めの夕食を取り、帰宅した。このレストランは雰囲気はカジュアルだが、出す料理は本格的だ。店長は本場パリで数年間修業した後、日本の某有名ホテルで働いて、独立開業した。
　深海の水底(みなそこ)を思わせる店内は鮮やかなロイヤルブルーで統一されている。毛足の長い絨毯も壁も深い蒼で纏められ、照明は極限まで落とした、やわらかなブルーだ。店内はさほど広くはなく、テーブル席が十数個あるだけ、二人が寄ったのはまだ夕方早い時間だったので、店内はさほど混んではいなかった。
　いつもは会話も弾むのに、その日は殆ど会話らしい会話もなく、食事が済むと早々に二人は席を立った。車の中でももちろん話をすることはなかった。
　夜になった。机の上の置き時計を見ると、既に十時を回っている。拓人は明日も忙しいのだろうから、彼のことを思えば、こんな夜分に話をするのは避けた方が良いのは判っていた。でも、やはり、今夜中にどうしても話がしたかった。
　幼稚園の先生になるのは子どもの頃からの夢なのだ。しかも、それが入学金免除の特待生として進学できるというのなら、尚更、その可能性を諦めたくはない。
　拓人は一階の書斎にいた。ここならば二階の彼の私室と異なり、愛奈も何度も出入りしたことがある。広い空間にはオーク材のどっしりした机があり、片面の壁には作り付けの書棚をありとあらゆる蔵書が埋め尽くしている。もう片側は大きく切りとられた窓になっている。
　今は既に窓は分厚いゴブラン織のカーテンに覆われていた。
「拓人さん」
　ノックをしても返事がなかったので、愛奈は思い切ってドアを開けた。
「拓人さん？」
　拓人は机に向かい、ぼんやりと肩肘をついていた。片手にはチューリップ型をしたウイスキーグラスが握られている。傍らにウイスキーのデキャンタが置いてあるところを見れば、一人で飲んでいたのだろう。

　視線はいつもの彼になく、焦点が合っているようで合っていない。何度か呼ぶ中に、やっとハッとしたように愛奈を見た。
「今、少しお邪魔しても良い？」
「あ、ああ」
　これもいつもの彼らしくなく曖昧に頷く。ここで言葉を弄しても意味がない。徒(いたずら)に時間が過ぎていくだけだ。愛奈は思い切って話を切り出した。
「昼間の面談の続きなんだけど」
　彼からの返事はなかった。愛奈は軽い失望を憶えながらも、心を奮い立たせた。
「あれって、本気なの？」
「本気、とは？」
　質問を質問で返され、愛奈は言葉を失ってしまう。
「結婚がどうこう言ってたけど、あれって何かの誤解か間違いよね」
「普通、誤解や間違いで、結婚の話なんかするか？」
　愛奈は困惑して言った。
「何で、そんなこと」
　拓人がこの時、初めて愛奈を見た。
「俺がお前を愛してはいけないのか？」
「拓人さんが私を愛して？」
　愛奈は自らの言葉で話すことを放棄した鸚鵡のように茫然と彼の言葉をなぞった。
「そうだ、俺はお前が好きだ、いや、そんな中途半端な言い方じゃ足りないくらい、愛している。お前が小さいときからずっと愛奈だけを見てきた。愛奈が一人前の女になるのを待ってたんだ」
「待って、拓人さん。それはもちろん私も拓人さんを好きよ。でも、その好きっていうのは、拓人さんが言うようなものじゃないと思うの。私は拓人さんをいつも親戚のお兄ちゃんとしてしか見たことがなかったから、今になって、そういう意味の好きだとか愛してるだとか言われても困る」
「今は従兄として好きなだけでも良いんだ、一緒に暮らしていく中に愛情が芽生えるかもしれないぞ」
　拓人の言葉に、愛奈は押し黙った。
「それにしても、結婚を考えるのは大学を出た後でも十分だわ。まずは大学に行って、それからちゃんと自分を活かせる仕事に就いて、世の中を見てみたいの。結婚の話はそれからゆっくりと考えさせて」
　愛奈は言葉を選びながら懸命に言った。だが、拓人の応えは無情だった。
「駄目だ。大学には行かせない。愛奈は高校を卒業したら、俺と結婚するんだ」
　あまりにも愛奈の意思を無視した言い方に、愛奈もつい頑なになった。
「何故、そんなことばかり言うの？　私は大学に行きたいし、まだ結婚なんて考えられないの。拓人さんがどうして私の未来を勝手に決めるのよ！」

「どこが勝手なんだ？　俺はお前のために良かれと思って」
「どこが良いの？　結婚したくないって言ってるのに、結婚しろと強要されて、そんなのが幸せ？　愛してもない男にプロポーズされて、それで歓べというの」
　つい口走ってしまった言葉に、拓人の形の良い瞳に絶望が浮かんだ。
「愛奈、俺はお前に愛されていないのか？　ブロポーズしてもただ疎ましいと思われるしかないほど嫌われているのかー」
　こうなると、売り言葉に買い言葉だ。言ってはならないとしきりに告げる心の囁きを無視して、愛奈は叫んだ。
「そうよ、そんな勝手な拓人さんなんて、私は大嫌い。結婚なんてしない」

　愛奈が叫んだその時、拓人がユラリと立ち上がった。彼はゆっくりとした足取りで近づいてくると、哀しみに覆われた瞳で彼女を見つめた。
「お前は俺の夢そのものだったんだよ、愛奈。いつも人形のように愛らしくて、にこにこ笑ってて、その笑顔だけで心が癒されるよう気がしたよ。お前がまだ小学校に上がる前から、俺は将来、妻にするのならお前だと決めていた。だから、叔父貴には申し訳ないけど、お前を引き取るこのときが長年の夢を果たすチャンスだと思ったんだ。これでやっと、お前が俺のものになると」
　初めて知る従兄の真実に、愛奈の声が震えた。
「じゃあ、拓人さんが私を引き取ってくれたのも、借金を肩代わりしてくれたのも、全部そのためだったの？　最初から私を好きなようにするために、全部やったことなの」
　そんなのって、酷い。愛奈の小さな心は哀しみに張り裂けそうだった。
「私はいや。それじゃ、あのサラ金業者の言うなりになるのと変わらないよ。私は拓人さんにお金で買われたの？　拓人さんは私を買ったの？　だから、拓人さんの言うことだけを聞いて夢を諦めなくちゃならないの」
「違う、そうじゃない」
　拓人は烈しく首を振った。
「俺は別にそんなつもりじゃない。お前を金で買っただなんて、ましてや金で縛って自由を奪うなんてつもりはなかった。ただ、愛奈が欲しかったんだ。可愛いお前をずっと側に置いておきたかった、いつもお前の笑顔を見ていたかった、ただそれだけだったんだ」
　でも、拓人のしたことは結果として、金で愛奈の身を縛り付け将来の夢や自由を奪うことと何ら変わりはない。
「拓人さんは私の気持ちを全然判ってないよ」
　愛奈は泣きながら首を振った。
「私、もう、ここにはいられない。拓人さんの気持ちを聞いてしまったからには出ていくべきだと思うし」
　愛奈は背を向けた。大好きだった従兄から心がどんどん遠くなってゆく。でも嫌いにはなりたくないから、今の中に彼から離れた方が良い。きっと拓人のためにも。
　けれど、拓人はそうはさせてくれなかった。いきなり背後から手を掴まれ、愛奈は振り向いた。
「放して」
「放さない」
　振りほどこうしても、拓人の腕は絡みついたように離れない。
「お願い、これ以上、私を嫌いにさせないで。拓人さんを大好きなままの私でここを出ていかせて」
　懇願するようにまなざしで問いかけると、拓人がゆっくりと首を振った。
「可哀想だけれど、この手を放してはやれない。そんなに容易く諦められる想いならば、最初から愛したりはしなかったさ。お前が俺を単なる従兄としてしか見ていなかったことは嫌になるほ

ど知ってたからな。だけど、この際、それはどうでも良い。大切なのは俺がお前をもう手放せないことだけだ。愛奈、お前はずっとここにいて、俺のものになる。それはもう決まったことなんだ、諦めて自分の運命を受け容れろ」
　だが、そんな理不尽な言い分を運命として受け容れろと言われて受け容れられるはずがなかった。
「私は絶対にいや。拓人さんの言いなりにはならないんだから」
　愛奈はそれでも拓人の腕を振り払おうとする。と、彼の手が腰と背中に回り、愛奈は拓人に強引に引き寄せられた。
「ー！」
　愛奈は予想外の展開に愕き、猛然と抗った。
「何をするの？　拓人さん、止めて」
　男の動きは止まらない。拓人は愛奈をグッと更に抱きしめると、今度は腰に添えた手はそのまま、もう一方の手で彼女のおとがいを掴み顔を仰のかせた。
「好きだ」
　そのひとことと共に与えられたのは、焔のような熱を孕んだ口づけ。最初は軽く触れ合わせるだけのキスから、下唇を紅を塗るようにやわらかく舐める。
　唇が一旦離れたことにホッとして愛奈が身を離そうとするのを戒めるかのように、いっそう強く抱き寄せられたかと思うと、また唇を塞がれた。今度は一度目とは比較にならないほど烈しい貪るようなキスが延々と続く。
「ーる、苦し、拓人さ、ん」
　呼吸すら奪うようなキスに目眩がして半ば意識が朦朧とした頃、息苦しさにわずかに口を開けば、今度はすかさずそこから彼の舌が割り込んでくる。
　逃げ惑う舌を追いかけられ絡め取られ、また烈しく吸い上げられる。肉厚の舌がねっとりと歯茎や歯列をなぞり、彼の唾液が愛奈の口中を浸食していく。愛奈が来るまでに相当の酒量を過ごしていたのか、彼の舌は濃厚なウイスキーの香りがした。
　長いキスを続けてすると、まるで愛奈自身もウイスキーに酔ってしまったかのような酩酊感を憶え始める。いつしか愛奈の口からは唾液が糸を引いて滴り落ちているが、それが彼のものなのか自分のものなのか判別さえつかなくなっていた。
　どれくらいそうやっていたのか。拓人の腕からふっと力が抜けた隙を見計らい、愛奈は渾身の力で彼の胸を突いた。
「こんなこと、止めて！」
　愛奈は狂ったように叫んだ。
「嫌いよ、大嫌い。最低だわ」
　泣きながら書斎を飛び出した。そのまま、どこをどうやって歩いたのか記憶にはない。
　気がつけば、小さな公園に来ていた。ここは毎朝、通る道、新しい通学路となった途中にある公園だ。確か、ここからＩ駅はすぐのはず。公園といっても、小さなブランコがあるだけで、狭い空き地を少しだけマシにしたようなものである。

愛奈はもう随分と年代物らしいブランコに乗ってみた。力を入れて漕いでみると、ブランコは軋んだ音を立てながら、ゆっくりと動く。
ギィーコ、ギーコ。
静かな夜のしじまに響くその音が何故か無性に物哀しくて、愛奈はまた、ひっそりと涙を零した。
いつから、こんな風になってしまったの？
どうして、そんな眼で私を見ていたの？
ただの従兄妹同士でいられたなら良かったのに。
でも、知ってしまった想いはなかったことにはできない。彼を愛してもいないのに、その想いに応えることはできない。
突然、ミャーという啼き声がして、愛奈は我に返った。足許に感じる小さな温もりに眼を瞠る。小さな黒猫が愛奈の脚にすり寄ってきていた。
「まさか、ね」
愛奈は一人、笑った。真っ黒で瞳の色が片方ずつ違う子猫など、そうそういない。しかし、愛奈が幼稚園児だった頃、自宅の近くの公園でしばらく面倒を見ていた親子猫の子猫は確かに真っ黒で片眼はエメラルドグリーン、片眼は金色だった。
でも、あれから既に十二年が経っている。あのときの子猫だって立派な成猫どころか、もう老齢だ。悪くすれば、死んでいるかもしれない。それだけの年月が経ったというのに、あの子猫が十二年前の姿そのままで再び今、現れるはずがないのだ。
けれど、今夜、あの子猫とそっくりな猫と出逢ったのも何かの縁のような気がしてならなかった。
「おいで」
愛奈は子猫を抱き上げ、そのやわらかな毛並みに頬を寄せた。小さな生命の温もりが今はささくれだった心を慰めてくれるようで。
また、止まっていた涙が溢れてくる。
公園の片隅には夜陰に紛れて、ひっそりとヒナゲシ(ポピー)の花が咲いていた。白い清楚な色が漆黒の闇に際立って見える。愛奈はブランコを降りると、ヒナゲシの花を一輪だけ摘み取り、子猫を抱えて歩き出した。
満天の星空の下、ゆく当てはなかった。結局、帰る場所はあそこしかないのだ。今の自分はあまりにも無力すぎた。ひっきりなしに頬を流れ落ちる涙が夜気に儚く溶けて散ってゆく。
六月初旬、日中は夏並みに気温は上がるものの、まだ夜は冷えた。クシュンと小さなくしゃみをすると、腕に抱いた子猫が気遣うようにミャーと啼く。愛奈は大丈夫というように子猫に微笑みかけながら、あの男が待つ家までの道のりをゆっくりと歩いた。

翌朝、愛奈はわざと階下に降りていく時間をいつもより遅らせた。むろん、拓人と顔を合わせたくないからだ。昨日の朝までは拓人が出勤する時刻にはいつもちゃんと起き出して、見送りにいっていた。その前に広いキッチンで拓人と向かい合って朝ご飯を食べるのが毎日の始まりになっていた。

朝食は大体は家政婦が用意してくれる。七時きっかりにはダイニングの縦長のテーブルにそれぞれの分がセッティングされているのだ。朝はほどよく焼いたトーストにスクランブルエッグ＆かりっとしたベーコン、コーヒー、それにグリーンサラダだったり、フルーツが添えられる。

キッチンのテーブルはあまりに大きすぎて、まるで〝最後の晩餐でもするような大きなテーブル〟と愛奈が言うと、拓人は声を上げて愉快そうに笑ったものだった。

たまに家政婦が遅れるときは、愛奈が用意することもあった。多忙で外食に傾きがちな彼の健康を考え、愛奈が作るときは和食中心を心がけていた。味噌汁とご飯と焼き魚に野菜の煮物。そんな素朴な献立を拓人はとても歓んでくれた。

―この味噌汁の味はお袋が作っていたのとそっくりだよ。

眼を細めて美味しそうに食べる彼を見るのが愛奈も嬉しかった。

ちなみに、彼の母親は今も健在である。この母美奈子というのがまた何かと話題になる女性なのだ。拓人の父が飛行機事故で亡くなったのは丁度十年前になる。商用でオーストラリアに渡る途中で起きた痛ましい事故の犠牲となった。その事故は世界中のテレビでも大々的に取り上げられ、多くの犠牲者を出したことで今も語り継がれている。

父の突然の逝去で、当時、私立高校三年だった拓人が代表取締役に就任し、その補佐には亡父の秘書だった男が付き、後見人はまだかくしゃくとしていた大叔父―つまり父の叔父に当たる男が副社長として付くことになった。

しかし、弱冠十八歳の少年は最初から補佐も後見も必要なかった。当初はお飾り社長になると誰もが思っていた高校生は自分から十指に余る傘下企業を擁するアークコーポレーションの経営に乗り出した。

それが成功をおさめ、企業新聞や経営雑誌、テレビにまで〝現役イケメン高校生社長〟として取り上げれ、彼は一躍有名人になる。しかも、端正で甘いマスクと長身の均整の取れた体軀が俳優、モデル並ともてはやされ、女性雑誌の表紙を飾ったこともあった。

アークは彼が社長になってからますます台頭し、傘下企業も格段に増えた。

彼の母美奈子が平城家を出ていったのは、そんな頃、アークが順調な滑り出しを見せていた時期であった。何と彼女はカルチャースクールのハワイアンダンス教室で知り合った講師の青年と電撃入籍を果たしたのだ。

当時、美奈子は四十五歳だったけれど、その若々しい美貌は到底大学生の息子がいるようには見えなかった。更に世間を驚愕させたのは、その時、既に美奈子は新しい夫となった男の子どもを身籠もっていたことだった。

こうして美奈子は四十五歳にして〝デキ婚〟を成し遂げ、十六歳年下の二十九歳の若い夫とともにハワイへと移住していった。今から八年前の拓人が大学二年のときのことだ。その二年後、拓人の母は年下の夫との間に更に第二子を儲け、現在もハワイで夫や息子と娘に囲まれて幸せな

第二の女の人生を生きている。
　美奈子の生き方を世間ではけして良く言う人ばかりではない。良い歳をした四十女が息子のような若い男とできちゃった結婚をし、海外に渡った。その奔放ともいえる生き方を更にドラマティックに書き立てた女性誌もあった。美奈子が有名人ともいえる拓人の母であることもいっそう、その話題性を高めたともいえよう。
　愛奈自身は美奈子とはあまり面識はない。若い頃から彼女はいつも出歩いていて、何かしらやっていた。しかし、たまに顔を合わせると親しく声をかけてくれたし、印象としては悪くはない、溌剌とした女だったように思う。
　愛奈の母のように、女は夫の言いつけには従順であるべきだと考えているような女とは対極にある女性だった。まだ十七歳の愛奈にはどちらが理想的なのかは判らない。ただ、息子の拓人が母親のそんな生き方を認めて祝福しているのであれば、他人が口出しするべきことではないと考えていた。
　だが、美奈子の作った味噌汁の味を懐かしげに語る拓人の様子からは、少なくとも彼にとって彼女は良い母親であったのだとは十分に理解できた。
　拓人と暮らし始めて二週間以上が経っていた。つい昨日まではこんなにも近くにいた人が今朝はもう遠い存在になってしまった。
　これまで従兄としてしか認識していなかった彼からの突然の求婚。それを契機として、愛奈は改めて考えてみた。拓人は自分にとって、一体、どんな存在なのか、自分は拓人をどう思っているのか。
　けれど、どれだけ考えてみても、〝大好きな従兄〟以上の応えは出てこない。つまり、昔も今も愛奈にとって、拓人は兄のような存在でしかないのだ。そんな彼をどうして男性として受け容れることができるだろう？
　そこで、思考はやはり昨夜と同じ位置に戻ってくる。拓人の自分への気持ちを知ってしまった以上、この家にはいられない。拓人の側にもう愛奈の居場所はないのだ。ならば、ここを出ていくしかない。もちろんゆく当てはないのは昨夜と変わりないけれど、かといって、いつまでもずるずると惰性でここにいるべきでないのも判っていた。
　拓人の想いに応えられない以上、自分はここにいる資格はない。彼にとっても目障りなだけだろうし、好意に甘えて居候することは人として許される行為ではなかった。
　また、拓人から仕掛けられた濃厚なキスを思い出すにつけても、いつまた彼があんな淫らなふるまいに及ぶかもしれない。そういう危険性も踏まえての判断は、やはり拓人の側にいてはいけないと愛奈に告げていた。
　拓人意外に頼れる親戚もいない。めぐる想いに応えはない。愛奈は進退窮まっていた。その朝は到底拓人と顔を合わせる気にもなれず、食欲もなかったので、八時過ぎに家を出た。大抵なら拓人が七時半に迎えにきた専用車で出勤した後、愛奈もすぐに家を出る。しかし、今日はこの分では遅刻は間違いないだろう。

　案の定、その日は高校に着いたのは九時を回っていた。昼休み、愛奈は担任の大木先生から生徒指導室に呼ばれた。職員室では何かと人眼があるから、二人だけで話せる場所を選んでくれたのはありがたかった。
「昨日の今日だから、僕も心配していたんだが、どうだ、あれから従兄とは話はできたか？」
　大木先生も気にしてくれていたのだ。愛奈はゆっくりと首を振った。
「やっぱり、駄目みたいです」
「そうか」
　大木先生は難しい表情で考え込んだ。
「君の従兄は本気で安浦と結婚しようというのか？」
　これにも愛奈は頷くことで肯定の意を示した。
「他人の恋愛に首を突っ込むのは野暮と言いたいところだが、僕は安浦の担任だしなぁ。それに、結婚云々はともかく、そのために大学進学を断念しろだなんて、あまりにも身勝手すぎる。結婚するならするで構わないが、何故、そんなに急ぐんだ？ まさか子どもが？」
　大木先生の言葉に、愛奈は真っ赤になった。
「とんでもないです。私と従兄はまだ全然、そんな関係じゃないですから。先生まで人聞きの悪いことを言わないで下さい」
　そんな関係じゃないと言ってから、昨夜の淫らなキスが突如として頭に浮かんだ。その拍子にカーッと顔中に全身の血が集まってきて、ますます頬が赤らむのを自覚してしまう。
　そんな愛奈を複雑そうに見つめ、大木先生は静かに言った。
「それで安浦、君自身はこれからどうするつもりなんだ？」
　大木先生は愛奈を見つめながら、軽く頷いた。
「いずれにせよ、僕は担任としても一人の大人としても、君個人の意思を最大限尊重したいと思うんだ。君の人生は他の誰でもない君自身のものだからね。長い人生をこれからずっと後になって振り返った時、後悔しないような生き方を君にはして欲しい」
「先生、私」
　愛奈は開きかけた口をつぐんだ。わずかに躊躇ってから、ようよう続ける。
「どんなに考えてみても、まだ結婚は考えられません。それに、拓人さん―従兄に対しても、幼いときから兄に対するような感情しか抱いてこなかったので、彼との結婚そのものについても自分がどうしたいのか判らないんです」
　と、大木先生は意外なことを言った。
「安浦は彼との結婚が嫌というわけではないのか？」
　いや？　拓人さんとの結婚が嫌―。
　初めて突きつけられた問いに、愛奈は言葉を失った。彼女は視線を揺らし、あからさまな戸惑いを面に浮かべた。
「正直、そんなことは考えてもみませんでした。私がいやなのは今すぐに結婚しろと命令のように強制されることなので」
　そんな風に傲岸に命じてくる拓人自身も嫌いだと思い込んでいた。けれど、真実はどうなのだ

ろう。そういえばと、愛奈は改めて思い出す。
　昨夜、強引にキスされたときも、あの行為そのものに嫌悪感は抱かなかったー。あれはファーストキスだったのに、拓人にいきなり奪われたときもショックで哀しかったけれど、けして不快感や嫌悪は感じていなかった。
　無意識の中に唇に触れている愛奈を見つめ、大木先生は言った。
「僕の話が参考になるかどうかは判らないが、ちょっとだけ聞いて欲しい。僕が嫁さんと結婚を決めたのはごく単純な動機だった」
「先生と奥さんって、確か中学生のときからの恋愛結婚なんですよね」
　授業の合間に幾度も聞かされた惚気話なので、周知のことだ。
　大木先生は年甲斐もなく頬をポッと赤らめている。
「まあ、な。それはともかく、僕はこれからの人生をずっとこいつの側で過ごしたい、そう確信したから、嫁さんと結婚したんだよ。結婚は恋愛とは違うとかよく世間では言う。それは確かにある一面の真実ではあるが、結局、基本は同じところにあると僕は思ってるんだ」
「基本、ですか？」
「そう、この人といつも一緒にいたい。その笑顔だけでなく泣いたり怒ったりする顔も全部見てみたいー、そういう気持ちになることが人を愛する瞬間じゃないかと思う」
　愛奈の耳奥で昨夜聞かされた拓人の言葉がリフレインした。
ー可愛いお前をずっと側に置いておきたかった、いつもお前の笑顔を見ていたかった、ただそれだけだったんだ。
　それでは、拓人さんは本当に私を必要としてくれているの？
　別に彼の気持ちを疑うつもりはなかったけれど、その想いの中身までじっくりと考えるだけのゆとりはなかったのだ。従兄としてしか見てなかった拓人からの突然のプロポーズはそれだけ衝撃的だった。
「どうやら安浦も彼のことは嫌いではないようだな」
　大木先生は笑い、すぐに表情を引き締めた。
「しかし、幾ら好きだとしても、その気持ちを押し通すためにお前の未来を歪めたり奪ったりすることは許されないよ。いや、好きだからこそ尚更、相手の意思を大切にしてあげるのが本当の愛というものだ。結婚そのものは君たちの問題だし、僕が口を挟む気はないが、進学については慎重を期する必要があるね。とにかくもう一度、君の従兄と話をしてみよう。何とか進学を認めさせるように説得するから」

「ありがとうございます」
　愛奈はペコリと頭を下げた。
「先生、私、従兄の家を出ようかと考えています。先生の言うように、私はもしかしたら、従兄を嫌いじゃないのかもしれない。でも、今のままの中途半端な気持ちで彼の家に居続けるのは従兄に対しても自分にとっても良いことじゃないと思うから。もっと一杯考えて、自分の気持ちやこれからどうするかが見えてきたら、そのときに彼と向き合おうと思ってます」
「そうだな、先生もそれが賢明な判断だと思うよ。従兄妹同士とはいえ、彼も独身で若いのだし、ましてや、彼は安浦と結婚したいとまで言っているのだから、やはり君が彼との結婚を前向きに考えられるようになるまでは同居すべきじゃないだろうな」
「はい」
　愛奈が頷いた時、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。
「それで、安浦、彼の家を出て、どこか身を寄せる当てはあるのか？」
　大木先生の言葉に、愛奈は小さく首を振った。
「僕のところに来いと言ってやりたいのは山々だが僕もこれでも一応、若い部類には入るしなぁ。嫁さんと子どもがいると言っても、年頃の女子生徒を自宅に住まわせたとなると、僕だけではなく君までもが心ない噂の的になってしまう」
　愛奈は明るく微笑んだ。
「先生、ありがとう。私は先生のその気持ちだけで十分です。私なりに色々と考えたんですけど、思い切って児童保護施設に行こうかと思うんです。私はもう十七歳だから、あと少ししか居させては貰えませんが、卒業までまだ数ヶ月先はあるでしょ。だから、その猶予期間の間にバイトとかしながらできるだけお金を貯めます。できれば住み込みで働かせて貰えるところを見つけたいの。もちろん、進学も諦めません。受験もして、働きながら大学に行く方法を考えます」
「そうか、そこまで考えたのか」
　大木先生は感に堪えたように言い、大きく頷いた。
「お前ならできるよ、安浦。僕はお前のような生徒が自分の教え子であることを誇りに思う」
「はい」
　愛奈も大木先生の眼を見つめ返しながら頷いた。
「さあ、次の授業が始まる。もう行きなさい」
　温かく言われ、愛奈は立ち上がった。
「ありがとうございました」
　それからドアを開けて出ていく間際、振り返った。
「先生、素敵な奥さんとお幸せにね」
「なっ、おい。大人をからかうもんじゃないぞ」
　男にしては色白の顔を真っ赤に染めた大木先生が狼狽えている。愛奈は笑いながら生徒指導室のドアを閉めた。

　その日の授業が終わった。愛奈は特に部活をしているわけでもないので、六限が終わり次第、

帰宅となる。N高校の校門前はそんな生徒たちの姿が至るところに見かけられた。
　愛奈が鞄を提げて校門を通りすぎようとしたのと横から声をかけられたのはほぼ時を同じくしていた。
「また逢ったわね」
　どこか聞き憶えのある声につられて振り向くと、数メートル先に女が佇んでいた。例のスナックのママ涼子という女だ。愛奈の脳裏に一週間前の出来事が甦った。いきなり現れて愛奈の頬を平手打ちにしていった失礼な女だ。ここで再会して良い顔ができるはずもない。
　愛奈が露骨に眉をひそめたのは丸分かりらしい。涼子は低い声で笑いながら、吹かしていた銜え煙草を口から引き抜き、地面でもみ消した。
「まあ、そんな怖い顔をしなさんな。それよりも、これからどこか行かない？　あ、近くにファミレスがあったから、そこでお茶でも、どう？　高校生ならマクドの方が良いか？」
「何かご用ですか？　あれだけじゃ足りなくて、また私を殴りつけに来たの？」
　愛奈が敵意を露わにして叫ぶのに、涼子はスと足音も立てず近づいてくる。手を伸ばしてきたので、咄嗟にまだ殴られるのかと身を退いた。
　だが、彼女は伸ばした指先を愛奈のツインテールにした長い髪にそっと触れただけだった。
「あんた、本当に良い度胸をしてるわよね。拓人のことは関係なしで、マジでうちの店に引き抜きたいわ。あんたみたいに初(うぶ)で可愛い顔してる癖に負けん気が強いコって、必ずこの世界では成功する。たくさんの新人を育ててきたあたしが言うんだから、間違いない。あんたなら、花街ナンバーワンのホステスにだってなれるわよ」
　愛奈はますます仏頂面になった。
「今日はスカウトに来たんですか？　申し訳ないけど、私は夜のお仕事はしません。今は大学行くのに少しでもお金稼ぎたいですけど、お昼の仕事を探しますから」
「お金が必要なの？」
　涼子が女豹を思わせる棗(なつめ)型の瞳をいっそう見開く。今日のスタイルは紫のレオパード柄のミニワンピースに黒の大きめバックルベルトを合わせている。大きくカットされたｖ字の胸許にはシャネルの大ぶりのネックレス、腕にはお揃いのゴージャスなブレスレットが燦然と煌めいている。
　いささか開きすぎの感がある胸許から豊かなバストが零れそうで谷間が見えていた。相変わらずの派手っぷりだが、その派手がしっくりと馴染んでいるのがこの女らしい。
「ええ、お金が必要なんです。私、拓人さんの家を出ることになりましたから」
　そのひと言は涼子に予想外の打撃を与えたらしい。彼女は長いウエーブヘアを鬱陶しそうにかき上げた。
　何か言いたそうな彼女に、愛奈は言ってやる。
「あなたは何か誤解してるんじゃないですか。私は別に拓人さんとは何の関係もないんです。拓人さんは従兄で、私にとってはお兄ちゃんも同然の身内です」
　と、涼子が鮮やかに塗られたワインレッド色の唇を引き上げた。
「あんたの気持ちなんて、私には関係ないのよ、お嬢ちゃん」

　涼子は愛奈からつと視線を逸らし、あらぬ方を向いた。その横顔に愛奈はハッとした。綺麗にメークをしているが、そのどこか疲れの滲んだ表情には初対面のときに感じた若さは微塵もなかった。
　よくよく見れば、目尻にも細かな皺が刻まれている。若く見えるけれど、もしかしたら三十半ばくらいなのかもしれない。拓人より年上であることだけは確かだ。
　女の視線は遠かった。
「あたしにとって大切なのは、あの男(ひと)の心がどこに向かっているのかなんだから。拓人さんが私を見てくれなきゃ意味がないのよ。だから、あたしはあんたに拓人さんは渡さない。あたしにはあの男と過ごした二年間があるわ。たとえあんたがどれだけ邪魔をしようが、男と女として過ごした二年はあんたが入り込めないものなの」
　涼子は一方的に喋るだけ喋ると、再び煙草に火を付けた。
「言いたかったのはそれだけ。マ、あんたと出逢ったのも何かの縁だろうから、拓人さんに棄てられて困ったときはあたしのところに来ると良いわ。あたしの眼は節穴じゃないからね。きっとあんたを花街ナンバーワンの女にしてあげる。大学に行くくらいのお金は楽々稼げるわよ」

煙草から紫の煙を立ち上らせながら、彼女は背を向けてゆっくりと去っていった。
彼女の言葉を信用すれば、あの女と拓人が愛人関係にあったのは間違いない。彼女と拓人の関係を詮索するつもりはないが、二年間も深い関係にあった女がいながら、ずっと愛奈だけを見つめてきたと平然と口にする男の狡さが哀しかった。
不思議な女だ。恋敵だと勝手に見なしている愛奈にこれ見よがしの敵意を剥き出しにする癖に、困ったら訪ねてこいと言う。元々は姐御膚の女なのだろう。あの様子では気っ風も良くて、自分の店で雇っている若いホステスたちの面倒見も良さそうだし、意外に慕われているのかもしれない。
愛奈も嫌いなタイプではなかった。もう少し違った形で出逢いたかったと思わせる女だ。ある意味、涼子の真っすぐさが羨ましいと思う。そこまで一人の男を愛せることが素直に羨ましい。
愛奈にはどうやれば男を愛せるのか判らない。愛とは何なのか。大木先生は、愛することは、その人とずっと一緒にいたいと思うことだと言った。笑顔だけでなく哀しい顔や怒った顔、どんな顔もいつも側にいて眺めていたい、そう思ったから、奥さんと結婚したのだと。
ならば、やはり、歓びだけでなく哀しみ苦しみさえも共に乗り越えようとする気持ち、それが愛と呼べるものかもしれない。あの涼子は果たして、どのように考えているのだろう。拓人となら、どのような人生の試練も受け止めて乗り越えていけると考えているのか。
十七歳の愛奈には、まだ理解するには深すぎる愛の深淵だった。今の愛奈にとって、涼子はまさに大人の女に見える。外見ではなく、彼女の生き方、愛し方そのものが。
次第に小さくなってゆく涼子を茫然と見送っていると、改めて周囲の視線を痛いほど感じた。顔だけは知っている三年生の男子生徒二人が興味津々といった顔でこちらを見て通り過ぎていく。
確かに涼子という女は真面目な生徒の多い公立高校では目立ちすぎる。拓人といい涼子といい、連れにするには勇気の要る人たちばかりである。
溜息をつき、愛奈は涼子とは正反対の方向に歩き始めた。今日はこれから寄るところがあるのだ。いつものようにＮ駅から電車に乗るのは一緒だが、今日だけは途中下車した。Ｓ駅で降りて満奈実のくれたメモ書きを頼りに反町君の家を探す。
Ｓ駅前の元町〇一△一×、サンシャインコーポ、メモ書きにはそう書かれていた。住所を辿っていくと、サンシャインコーポはすぐに判った。駅前ということもあり、判りやすかったことも幸いしたようだ。
愛奈はメモを片手に小さなコーポラスを見上げた。どう見ても築三十年以上は経過しているらしいその建物は鉄筋二階建だ。反町君がただ一人の親友以外に、自宅のありかを告げたがらない理由も何となく察せられた。
部屋番号は二〇三となっていた。ここまで来て引き返すわけにもいかない。愛奈は勇気をかき集めて二階へと続く階段を上った。二階へは外からそのまま上がれる階段が続いている。
二階に上がると、似たようなドアが幾つか並んでいる。鉄製の狭い通路に洗濯機が置かれているところもあれば、無人なのか長旅にでも出ているのかポストに新聞や郵便物が溢れんばかりにたまっているところもあった。

二〇三と部屋番号がドアにマジックで書かれている。インターフォンがあったので、試しに押してみると、ブーと思わず飛び上がるほど大きな音が鳴って慌てた。
「はい？」
ほどなく中側からドアが開いた。よほど運が良かったのだろう、反町君その人に逢えた。
「君ー」
流石に反町君の整った面には愕きがありありと現れていた。
「あ、あの。私、二組の安浦愛奈といいます。今日は突然、訪ねてきて、ごめんなさい」
愛奈も彼に逢いたい一心で来たものの、いざ顔を合わせてみると何をどう話して良いのか判らなくなった。とりあえず持参したものを渡さなければと小さな紙の手提げ袋を差し出す。
「これ、私が作ったの。また食べて。それから、転校するって聞いたから、お別れの記念にと思ってー」
お別れの記念という言い方も我ながら随分と妙だ。しかし、こういう場合、どういう言い方が適当なのか判断がつきかねた。ここに来るまでは告白しようと思っていたが、こうして顔を見てプレゼントまで渡すことができただけで十分だと思った。
反町君は黙って紙袋を受け取った。中を覗き込むと、存外に屈託ない笑顔を浮かべた。
「へえ、クッキー。君が焼いたんだ？」
「そう」
そこで少し考えて、付け足した。
「本当は来年のバレンタインに手作りチョコを渡そうと思ったんだけど」
反町君の黒瞳がじいっとこちらに向けられる。愛奈は居たたまれなくなり、紅くなった。
「こ、告白しようかなとか思ってたりしてたから」
思わず声が上擦ってしまった。変な女だと思われていなければ良いが。
「良かったら、ポールペン、使ってね。これから受験とかあるし、大学に行っても使う機会はあるだろうから」
それだけ言うと、後は何も言うべき言葉がないのに気づき、焦った。
「それじゃ、これで。北海道に行っても、元気でね」
ぎごちない様子で回れ右をして立ち去ろうとしたその刹那、いきなり背後から抱きしめられ、愛奈は固まった。
ーえ、な、なに？
「ありがとう。一生大切にするよ」
吐息混じりの言葉が耳を掠める。反町君の息遣いも愛奈の身体に回された手も何故かとても熱くて、抱きしめられた愛奈自身もその熱が移ってしまったかのように熱くなった。
「ごめん、僕がまだ若すぎて何の力もないから、君に好きだと告げることもできなかった」
そのときの彼にとっては、そのひと言が精一杯の言葉だったのだろう。反町君はすぐに手を放し、愛奈を自由にしてくれた。
その時、自然に眼と眼が合い、二人は気まずそうに視線を逸らした。二人とも頬がうす紅く染まっていた。

愛奈が小さく頭を下げて行こうとするのに、〝待って〟と彼が声をかける。
「駅まで送らせて」
彼は一階の自転車置き場から年代物らしい自転車を引っ張り出してきた。愛奈の鞄は前籠に入れてくれ、自転車を押した彼と愛奈は並んで駅までの道をゆっくりと辿った。
その道すがら、愛奈は反町君から想像もしていなかった話を告げられた。
今回の急な転校は、実は父親が経営を任されている工場が急に閉鎖されることになったためだという。
「北海道の方に関連工場があるんで、そっちの方に転勤という形で行くことになったんだ」
反町君は淡々と説明する。更に彼は愛奈にショックを与えることを言った。

「父が雇われ工場長をしていた工場は子ども服を作っていてね。親会社は結構名の知れたメーカーで、更にその上にそこを傘下にしているアークコーポレーションという一流企業がある。親父が工場閉鎖と転勤を宣告された時、上から言われたそうだよ。同じ高校に通う息子に安浦愛奈という女子生徒とは今後、何があっても一切関わり合いにならないようにさせろって。もしその約束が守られなければ、北海道工場の話もどうなるか判らない、つまり首切りを暗にほのめかされたんだよ」
「一」
　愛奈は最早、言葉もなく蒼白になっていた。
　反町君が気遣うように彼女を見た。
「大丈夫？」
　愛奈はそっと頷くしかない。彼は弱々しい笑みを浮かべた。
「僕も君と同じだ。晴れて受験が終わって卒業式の日が来たら、君に思い切って告白しようと思っていた。もっとも、バレンタインに君から告白してくれたのだとしたら、卒業よよりは少し早く付き合うことになったかもしれないけどね」
　反町君が愛奈から視線を逸らした。
「親父から言われたよ。僕が安浦愛奈という子とどういう関係があるのかは知らないが、彼女はアークの若社長の婚約者だから、間違っても手を出しちゃいけない」
　ごめんね、と、彼はまた謝った。
「何だか学校でも噂になってたらしいけど、僕は君が好きだった。サッカー部の悪友に二組に可愛い子がいて好きなんだって、うっかり洩らしたのがいけなかったんだろうな。あいつ、お喋りだから」
　その悪友というのが恐らく満奈実がこの住所を聞き出した彼の親友に違いない。
　彼は眩しげに空を見上げた。すっかり長くなった夏の夕陽が長身の彼の影を舗道に映し出している。そろそろ暮れ始めたオレンジ色の空が妙に遠くにあるように思えた。
「もし僕が高校生じゃなかったら、せめてもう少し大人だったら、僕は君がアークの社長のフィアンセであろうと、気持ちを堂々と打ち明けたと思う。その上で君が社長よりも僕を選んでくれたなら、僕は社長を敵に回しても君をさらっていった。でも、僕たちはまだ高校生にすぎない。仮にこのまま君とどこか遠くに逃げたとしても、僕は君の幸せを守ってあげられると約束はできないんだ。勇気と意気地のない僕を許して」
　ううんと、愛奈は泣き笑いの表情で首を振った。
「最後に反町君の気持ちを聞かせて貰えて嬉しかった。私の方こそ、ごめんね。私がアークの社長にあなたのことを喋ってしまったの。カッコ良くて素敵な男の子がいるから、告白しようかと思ってるって」
　よもやその他愛ない打ち明け話がひと組の父子の一少年の運命を無残に変えることになるとはあの時、考えもしなかった。
　拓人は最も卑怯な手を使った。愛奈の生まれて初めての恋はまだ芽吹くその前に、拓人によって摘み取られてしまったのだ。もう二度と、芽吹くこともできないほど徹底的に踏みつけられた

。
　だが、これだけは彼に伝えておきたいと思った。
「でもね、これだけは信じて。アークの社長は私の従兄だけれど、婚約者だというのはまったくのデタラメよ。私たちの間には何もないし、私は彼をお兄さんのようにしか見たことはないわ」
「そうなんだ」
　反町君は頷き、晴れやかな笑顔を見せた。
「僕は大学へは行かない。君に余計な心配をさせてしまうから黙ってようと思ったんだ。でも、君には僕も本当のことを知っておいて欲しいから、正直に言うよ。北海道工場に行ったとしても、どうなるか判らないんだ。そこはもう倒産寸前の弱小工場らしいからね。親父は転勤とは名ばかりの体の良い首切りだって言ってる。多分、僕を君から遠ざけたいためにアークの社長が仕組んだことだろう」
　だから大学には行かないけど、君に貰ったボールペンは大切にするよ。
　彼はそう言って、また笑った。
「君が来てくれるなんて、夢のようだ。最後に逢えて両想いだと判って、嬉しかった。逢えるのなら僕もちゃんと何か用意しておくんだったな」
　反町君はジャージの上下を着ている。カッコ良い男の子だから、何を着ていても様になる。彼はそのズボンのポケットから一本のペンを出した。
「これ、僕からのお別れの記念品。本当なら女の子の歓びそうなものを用意できれば良かったのに、使い古しでごめん。僕がいつも使っていたシャーペンなんだ」
　ありがとう、と、愛奈は言おうとして言葉にならなかった。涙が溢れきて、上手く喋れなかった。
「ー」
　反町君も何も言わなかった。彼が自転車を停める。黙って愛奈を引き寄せ、腕に抱いてくれた。
「本当に済まない、好きだったよ。最後に逢って、初めてたくさん話して、余計に大好きになった」
　顔を持ち上げられるままに、愛奈は彼を見上げた。そっと落ちてきた口づけは最初は額に、次は唇に。どちらも軽く触れ合わせるだけ、優しい温もりを感じた程度のものだった。
　それから彼は人差し指で愛奈の目尻にたまった涙の雫をぬぐい取ってくれた。
「ごめんなさい。私の方こそ、余計なことを言ったばかりに、あなたとお父さんを大変なことに巻き込んでしまって」
　愛奈が泣きじゃくりながら言うと、彼は優しく言った。
「君のせいじゃない。僕たちはどんなに好きでも想い合っても、きっとこうなる一結ばれない運命だったんだ。だから、君も自分を責めないで」
　愛奈は涙ながらに言った。
「最後に一つだけお願いがあるの」
「なに？」

　優しい声。たぶん、自分は今日のこの別れを永遠に忘れないだろう。彼のやるせなさそうな顔を、唇に感じた優しい温もりも背中に回された確かな手の感触も何一つ忘れない。
「北海道に行っても、サッカーは続けて。私は反町君のゴールを決めるときの姿をひとめ見て、それで好きになったの。だから、遠くに行っても、大学へは行かなくても、どんな形でも良いからサッカーは続けて欲しい」
「判った。ここで約束する」
　彼は微笑んで愛奈の前に小指を差し出す。その指に愛奈が自分の指を絡めた。
　蜜柑色の夕陽がいつまでも絡めた指を放そうとしない若い二人の姿を温かく包み込んでいる。
　後に反町大地は夜間高校を経て苦労して通信制大学を卒業、サッカー部に所属して全国大会で活躍していたところを認められ、上京してサッカーで有名な企業に就職した。後年、Ｊリーグにも参加し、三十歳を過ぎてのオリンピック出場を果たし、遅咲きの大物といわれた。
　愛奈が彼と涙の再会を果たしたのは、彼が遠い異国で開催されたオリンピックで活躍する様が衛星放送で日本でも伝えられたときである。
ーー点差の逆点優勝を日本チームにもたらした奇蹟のゴールキック！　最大の功労者反町大地選手に歓びのインタビューです。
　試合直後に日本人レポーターからマイクを向けられた反町選手はこう語った。
ー日本にいる永遠の恋人に、この歓びを捧げます。
　陽に灼けた精悍な彼の頬には流れ落ちるひとすじの涙があった。
　この後、反町選手が三十四歳で独身ということで、その恋人というのが誰なのかマスコミでも話題になったこともあったが。
　既に一流企業アークコーポレーション社長夫人となっていた愛奈と彼の画面越しの切ない再会だったー。
　この後日談はもちろん、十七歳の二人の別れよりもずっと後の出来事になる。
　Ｓ駅前で二人は別れた。
「北海道は寒いでしょう、風邪引かないでね」
「君も元気でね」
　反町君は元来た道へ、愛奈は電車乗り場へとそれぞれの道を進むしかなかった。二人の想いは真実ではあったけれど、彼の言うように、その想いを貫き通すには二人ともにまだ若すぎた。

Ｐｒｉｓｏｎｅｒ（囚われる）

反町君に涙の別れを告げた愛奈は一旦、拓人の邸宅に戻った。彼から告げられた事実はあまりにも衝撃的すぎて、愛奈の心では様々なことがバラバラに入り乱れて、感情の収拾がうまく付けられなくなりつつあった。
考えなければならないことがあることは判っていたけれど、今はただひたすら現実から逃れたかった。信じていた拓人が卑劣な手段を使って反町君と愛奈を引き裂いたこと。涼子という恋人がいながら、その一方、素知らぬ顔で愛奈に平然と愛を囁いた拓人の心。
もう、誰の何を信じれば良いのか判らない。愛奈はこんな場所には一刻たりともいたくなかった。拓人は優しい顔をして平気で嘘を囁く。そんな彼のどこを信じれば良いというのだろうか。
拓人は自分が欲しいものを手に入れるためには手段を選ばない男、とても冷酷な一面がある。愛奈が知り得たのは、哀しいことに拓人の怖ろしい素顔だけだった。このまま拓人の側にいれば、何が真実で何が嘘なのかまで判らなくなりそうで怖い。
愛奈は帰宅するなり、当座の荷物を纏めて小さなボストンに入れた。ここに来る時、拓人は身一つで来れば良いと言ってくれた。だから、持ってきたものなど実は殆どない。当座の着替えなどと学校のテキストやノートだけだ。拓人から新たに与えられたものはすべて置いていくつもりだった。
出ていくときの荷物は自分でも呆れるほど少なかった。通学用鞄に詰め込んだテキスト・ノート類、小さなボストンに納まり切れるほどの服と下着、そんなものだ。改めて自分が何も持たない身であると思い知らされたようで、それはもちろん判っていたことだけれど、愛奈は酷く心細い想いに駆られた。
Ｉ駅前にネットカフェがある。とりあえずはそこに行くことにした。児童保護施設には翌朝、電話するつもりだ。すぐに受け容れて貰えるかどうかは判らないが、こんな中途半端な時間に電話しても、埒があかないだろう。
愛奈は二つ折りの携帯電話を開いた。このメタリックピンクの携帯は実は拓人に与えられたものだ。待ち受けの時間は午後七時半を指している。特に残業や接待がなければ、そろそろ拓人が帰ってくる時間だ。
愛奈がいないことを知った彼はどうするだろうか。探すだろうか。怒り狂うのか。反町君に告白しようと思う一ただそれだけを告げたのに、拓人は反町君の父親に解雇同然の処分を下し、遠い北海道に追放した。
そのことで、愛奈は拓人の怖ろしさを初めて知った。借金を肩代わりしてまで側に置こうとした愛奈が逃げ出したと知れば、腹を立てるに違いない。考えただけで、背筋が寒くなるほどの恐怖を憶えずにはいられない。
これだけはどうしても置いていくわけにはいかなかった。色々と必要だといのがいちばんの理

由だが、画像フォルダの中には反町君と別れ際、二人で撮影したツーショットの写真も入っている。二人きりで撮影した最初で最後の写真なのだ。
　幸運にもこのネットカフェは二十四時間営業だから、誰にも咎められずに翌朝までは過ごせる。
　モノトーンダイヤが並んだ床が広がる大きな空間に無数の仕切りが立てられている。その仕切り一つ一つに小さな個別スペースがあり、簡易デスクとチェアが備え付けられてあった。
　デスクにはデスクトップパソコンが一台ずつ常備されている。もちろんインターネットに繋ぐこともできるし、使い方は自由自在だ。デスクは大きく取られた窓に面しており、窓の向こうには狭いながらグリーンの配置された人工の庭まで見えるという凝った趣向である。
　共用スペースにはドリンクコーナーまである。コーヒーや紅茶、ジュースがいつでも飲み放題というサービスも嬉しかった。
―ひらきたくと、ひらきたくと。
　愛奈は自分でも知らぬ中に、キーボードを叩いていた。気がつけば、パソコンの画面には〝ひらきたくと〟の名前だけがそれこそ無数に数え切れないほど並んでいる。
　私ったら、何をしてるのかしら。
　愛奈は小さく首を振り、再びケータイを開いた。画像フォルダを開き、今日、撮ったばかりの反町君との写真を出してみる。そこには微笑んで寄り沿い合う二人の姿があった。恐らく愛奈にとっては永遠の宝物になるはずだ。
―私は反町君を好きなのに、どうして、考えるのは拓人さんのことばかりなの―。
　と、愛奈の足許―デスクの下に置いた小さなバスケットの中でか細い啼き声が聞こえた。愛奈は慌ててしゃがみ込んで、バスケットを開く。真っ黒な子猫が顔を覗かせた。
「シーィ。静かにしないと追い出されちゃうからね」
　基本的にペット同伴はお断りの店内である。盲導犬のような場合は認められているが、子猫は絶対に無理だろう。昨夜、公園から連れ帰った子猫は〝エメ〟と名付けてミルクやキャットフードを与えて大切に世話していた。瞳の色がエメラルドとゴールドだから、エメである。安易な名付けだと子猫に恨まれそうだ。
　愛奈はエメの頭をよしよしと撫でて、可哀想なので蓋は閉めずにそのままにしておいた。咽が渇いたので共用スペースに行って冷たい紅茶を紙コップに注いだ。
　室内はあまり冷房が効いていないようで、じっとしていても汗が浮いてくる。額に滲んだ汗を手のひらで拭った時、背後で声がした。
「愛奈」
　その優しすぎるほどの呼びかけに、愛奈は華奢な身体を震わせた。
「随分と探したぞ、帰ろう」
　拓人に手首を掴まれ、愛奈は振り向いた。
「放してください」
「愛奈―」
　拓人が哀しげに自分を見ていた。悪いことをしたのは拓人の方なのに、何故か愛奈が彼を苛め

ているような気になってくる。
「拓人さんは卑怯よ、反町君のお父さんにまで手を出して、勝手に私の知らないところで転勤なんかさせたりして」
「何故、お前がそれを知っている？」
　この時、拓人の静かすぎる表情が初めて動いた。
　愛奈はそのわずかな変化に気づかず、思わず叫んでいた。
「反町君から聞いたの！　そのせいで、彼はもう大学にも行けなくなったのよ」
　拓人の切れ長の双眸がスウと細められた。
「お前はあいつに逢ったのか？　あの男はもう学校には二度と出てこられないようにしてやったはずだが」
「一酷い」
　愛奈は非難と軽蔑をこめたまなざしで拓人を睨んだ。
「転校するまでにまだ日にちがあるのに、反町君が学校に来なくなってしまったのは拓人さんが裏で手を回したからなのね」
　愛奈は信じられない想いで叫んだ。
「何でそこまでするの？」
　だが、会話はそこで途切れた。拓人がいきなり愛奈を抱き上げたからだ。
「何をするの！？　いや」
　まるで荷物のように肩に担ぎ上げられた愛奈は悲痛な叫びを上げた。
　店内にはかなりの数の客がいたが、むろん、この騒動に皆がちらちらと好奇の視線を送っている。

「お客さま、店内での揉め事は困ります」
　騒ぎを聞きつけた店員が駆け寄ってくるも、どこからともなく現れた黒服の背の高い男がさっと店員に近寄り何事か耳打ちした。
　雰囲気としてはボディガードといった感じで、均整の取れた身体を黒服の上下に包み、サングラスをかけている。その男が店員に何かを囁き一万円札を数枚渡すのを愛奈は確かに見た。
「卑怯者、こんなところまでお金で片を付けるのね」
　涙が滲んだ。信じていた優しい従兄、いつも温かなまなざしをくれた年上の男。その真実の姿がこれだったとは。自分は一体、拓人の何を見ていたのだろう。
　金を握らされた途端、店員は大人しくなった。見て見ぬふりを決め込むのだ。客たちも騒動に巻き込まれては叶わないと誰も愛奈を助けてくれようとする者はいない。ただ遠巻きになりゆきを見守っているだけだ。
　結局、愛奈は泣き叫びながら拓人に連れ去られてしまった。ミャー、ニャーとエメがしきりに啼いている。小さな子猫だけが拓人に抱えて連れ去られようとする愛奈を助けるつもりなのか、果敢に拓人の足許に寄っていたけれど一。黒服のボディガードにその度に邪険に追い払われてしまった。
　拓人に担がれた愛奈の耳にエメの哀しげな啼き声が遠く聞こえた。

　駅近くの駐車場には見憶えのある高級車が停めてあった。拓人が通勤用に使っている黒の国産車である。拓人はその車に愛奈を放り込み、自分もすかさず隣に乗り込んだ。例の黒服ボディガードが運転席に乗り込み、車はすぐに発進する。
「どちらに行かれますか」
「鳳彩に行く」
「畏まりました」
　短いやりとりの後、車が発進する。高級車は深いぬばたまの闇の中をすべるように走った。時間にしてはどれほどのものだったのか、長いようにも短いようにも思えた。
　車が停車したのは、どこかの地下駐車場らしかった。先に車から降りた拓人に愛奈は再び横抱きにされる。
「一人で歩くから、降ろして」
　懇願しても無駄なことだった。拓人に愛奈を降ろす気はまったくないのは判った。拓人に抱えられたまま愛奈は地下駐車場からエレベーターに乗った。ボディガードは付いてくる様子はない。
　二人を乗せたエレベーターは十一階を示す数字が点滅している階で止まった。拓人は愛奈を抱いて絨毯の敷き詰められた長い廊下を歩く。深紅のベルベットを思わせる絨毯を拓人に抱かれていく中に、愛奈はふと自分が花婿に抱かれてバージンロードを進む花嫁のような想いに囚われた。
一私ったら、馬鹿だわ。こんなときに何をくだらない夢みたいなことを。
　現実は花嫁と花婿どころではない。こっそりと何も告げずに逃げ出して拓人は相当怒っている

だろう。しかも、反町君と逢っていたことまで愛奈は迂闊にも喋ってしまった。
　これからどんな酷い目に遭うのか、考えただけで身体中の膚が粟立つ。
　とある部屋の前で、拓人の歩みが止まった。部屋のドアを開けて入ると、彼はそのまま中に入る。背後でカチャリと自動ロックされた音が無機質に響いた。
　愕いたことに、部屋は豪華なスイートだった。二部屋ある中の一つが洋風のリビング風でドレッサーやテーブル、ソファセットが整然と並んでいる。和洋折衷らしく、奥の寝室は畳敷で既に大きな布団が敷かれている。鮮血をイメージさせる緋色の夜具が照明を落とした中にうすぼんやりと浮かんでいる光景は何かとても淫靡な雰囲気を漂わせていた。
　枕許にあるのは行灯を模したスタンド。その唯一の光源に、何故か派手な色柄の長襦袢が掛けられているのはインテリアだろうか。
　その光景を見た刹那、愛奈は生理的な嫌悪感を感じた。何か見たくないものを見せられているような。その理由が最初は判らなかったけれど、直に思い当たった。室内の様子がいつかテレビの時代劇ドラマで見た遊廓にそっくりだったのだ。
　それは確か吉原遊廓を舞台にした花魁のドラマだったと思う。苦界と呼ばれる吉原という女の地獄で生きる女たちの愛と哀しみを描いたものだった。
　拓人が何故、こんな場所に自分を連れてきたのかは判らない。でも、何かこれが自分にとっては危険な状況を示しているのだということは愛奈にも察知できた。
「ここなら見せ物にならずに、ゆっくりと話ができる。さて、お前が何故、あの男と逢ったのか聞かせて貰おうじゃないか」
　拓人は洋風のリビングには見向きもしなかった。大股で洋間を横切り、襖を脚で開けるなり、愛奈を血色の褥に放った。
　愛奈は小刻みに身体を震わせながら言った。
「拓人さん、ここじゃなくて隣の明るい部屋で話をしたいの」
　だが、拓人はそれが聞こえなかったかのように質問を繰り出してゆく。
「あの男は学校には行ってないはずだ。なのに、お前たちは逢った。つまりは、お前があいつを訪ねていったのか？」
「私は」
「お前は俺の婚約者なんだぞ！　将来の夫が決まった身でのこのこと他の男に逢いにいったのか」
　今日の拓人さんはおかしい。愛奈は拓人の異常さに怯えた。第一、愛奈は拓人と婚約などした憶えはないし、彼を未来の夫と認めてはいない。言っていることが支離滅裂で、事実と全然一致していない。
「私は拓人さんと婚約なんかしてないし、結婚を承諾したつもりもないのに。何でそんなことを勝手に決めるの？」
　涙が溢れて止まらなかった。
　拓人が一旦部屋から出ていった。ホッとした矢先、すぐに戻ってきた彼の手にはピンクのケータイが握られていた。拓人は愛奈を抱いていたはずだから、あのボディガードが荷物を運び込ん

でおいたのだろうか。
　やばい、あれを拓人に見られたら、万事休すだ。愛奈は桜色の唇を戦慄かせた。
「拓人さん、そのケータイには今度の実力テストの範囲表が入ってるの。不用意に触って画像が消えたら困るから」
　暗に触らないで欲しいと頼んだのに、彼はわざと見せつけるように愛奈の眼前で二つ折りケータイをゆっくりと開く。それをのぞき込みながら、口角がニヤリと笑みの形を象った。
「なるほど、そういうことか」
　彼は意味ありげなまなざしで愛奈を見た。
「まったく、とんだ売女だな。天使のような愛らしい顔をして男に媚を売る淫乱女か」
　拓人の美しい顔がいっそう艶を帯びて艶麗に輝く。
「この写真を見ただけで、お前が俺を裏切った証になる」
　拓人は忌々しげに呟き、ケータイを力をこめて投げつけた。一度では足りず何度も拾い上げてはたたきつける。
　愛奈は悲鳴を上げた。
「止めて、ケータイが壊れちゃう」
　反町君との想い出がなくなってしまう。
「壊れたって構うものか。また新しいのを買ってやる」
　拓人は興奮の色を秀麗な面にのぼらせ、鼻で嗤った。
「いや、ケータイだけじゃない。いけないことをしたお前にもきついお仕置きが必要だな。二度と私に隠れて悪さなどしないように躾けておかなくては」

〝仕置き〟という禍々しい響きの言葉に、愛奈はまたも怯えた。
「お願い、乱暴はしないで」
震えながら哀願する彼女に、拓人はいっとう優しい声色になる。
「もちろんだ、俺の可愛い愛奈に乱暴なんかするものか。うんと可愛がって、この世の極楽を見せてあげよう」
やはり拓人は尋常ではない。愛奈はじりじりと座ったまま後退した。拓人が追うように間合いを詰めてくる。
「おいで、可愛い俺の小鳥」
拓人の美しい顔にこれまで見たことがないほど艶やかな微笑が浮かんだ。
一刻の後。
冬の椿を思わせる深紅の褥の上には、一糸纏わぬ姿にされた愛奈が横たわっていた。両手は高々と持ち上げた形で緋色の紐で縛られている。
「あ、あぁっ、うーん」
声を洩らすまいと固く歯を食いしばっても、拓人の巧みな愛撫の前には無垢な愛奈の抵抗を封じ込めるのなど赤児の手をひねるよりも容易いものだ。
拓人の熱に浮かされた唇が愛奈の首筋から鎖骨、胸の谷間を辿る。さんざん揉みしだかれ吸われ続けた胸の突起は紅く染まり、唾液に濡れ光っているのが何とも淫猥だ。
拓人は実に女の身体をよく知っている。さんざん愛撫を施された乳房の突起が触れて欲しいとしきりに訴えているのを知りながら、わざとその唇はその箇所を外れて通過していく。
「どうだい、ここだけでなく胸も触って欲しいかい？」
拓人は何とも蠱惑的な声音を愛奈の耳許に注ぎ込む。既に胸と蜜壺への同時の愛撫を施され、愛奈は二度も絶頂に達している。むろん、最初は泣き叫んで烈しく抵抗した。だが、さんざん暴れる愛奈の耳許で彼はこう告げたのだ。
―お前次第では、あの哀れな父と息子を北海道にも行けなくしてやることもできるんだぞ？
その言葉の示す意味は漠然としていた。単に転任先の仕事も奪ってやるという意味にも取れるし、考えたくはないが、この世からの抹殺という意味にも取れないこともなかった。
優しい従兄がそんな犯罪のようなことに手を染めるとは思いたくないが、先刻の胡乱なボディガードを雇っているところを見れば、愛奈の知らない場所でかなりきわどいこともやっているのは明らかだった。
反町君やその父親を盾に脅されては、最早なすすべはなかった。抵抗を止めた愛奈を拓人は意のままに扱った。
更に愛奈は過酷な現実を突きつけられた。拓人に愛撫を施された身体は直に快楽という名の降伏をあっさりと受け容れたのだ。乳房を捏ねられるように揉まれ熱い口で吸われれば、微弱な電流のようなものが乳首から全身に走り抜け、下肢は甘く潤んでいった。
流石に自分でも触れたことのない花園に触れられたときは弱々しい抵抗を示したものの、それも恥丘の割れ目をなぞっていた指が花唇をひらき蜜壺に侵入してくる頃には、もう陥落して甘い喘ぎを上げていた。

「愛奈がこんなに快楽に弱い身体だったなんて、知らなかったよ。嬉しい発見だな、これは」
　拓人はすごぶる上機嫌だ。今も愛奈は蜜壺に二本の指を抜き差しされながら、クチュクチュと胸の先端を吸い立てられている。彼のざらざらした舌で乳輪を円を描くように舐められ、先端を弾かれると、言葉にはできないような痺れが乳首から下半身にかけて駆け抜ける。
　更に同時に下半身を弄られれば、瞼の奥には様々な色の鮮やかな光が絶え間なく閃き、夢見心地になった。
「うぅ、あーん」
　全裸で蜜壺を弄られ、胸を吸われて責め立てられる愛奈はひっきりなしに艶めかしい喘ぎ声を上げている。白い裸体が緋色の褥で悶え乱れる様は見ていられないほど嫌らしく、拓人はそれを恍惚の表情で眺めていた。
「綺麗だ。堪らないくらい色っぽいね」
　拓人の額にひとすじの前髪がはらりと乱れてかかれっていた。元々が美しい男だけに、今、彼は壮絶な色香を醸し出している。虚ろなまなざしの奥には消えることのない情欲の焔が炯々と点り、どこか壊れたような口調で愛奈の身体の感じやすさを褒めたたえる。
　それを延々と聞かされる愛奈は我が事だけに、余計に羞恥に悶えることになる。拓人は女の身体だけでなく言葉でもいたぶり責め立てることで、余計に興奮して自らも煽られていくようだった。
　もうこれで幾度めの絶頂に達しただろうか。愛奈は息も絶え絶えのところを烈しく口づけられ、酸欠状態で意識も朦朧としていた。そのため、拓人が彼女の両脚の間に入り込み、そのすんなりした脚を大きく割り裂いたのも気づかなかった。
「これだけ解して濡れれば十分だろう、ん？」
　また奪い尽くされるような烈しい口づけを仕掛けられた。息の出来ない苦悶にもがいている中に、彼女の濡れそぼった蜜壺の入り口に猛った固い楔が当てられた。
　次の瞬間、愛奈の白い身体が大きく撥ねた。
「い、ーたい。痛ぁーい」
　自分の身体に何が起こったのかも判らず、愛奈はただ断続的に襲う激痛に涙を振り零した。
「痛いっ、拓人さん、痛いの」
　泣きながら痛みを訴える愛奈の髪を撫で、拓人が優しく言い聞かせるように囁く。
「大丈夫だ、すぐに良くなるから、しばらくの辛抱だ」
ー良くなる？
　その言葉の意味も判らないままに、痛みはどんどん増してゆく。そして、最後の激痛が訪れた。まるで下半身が真っ二つに裂かれてしまったのではと思うほどの痛みだった。
「ー！　あぁっ、あ、痛い」
　愛奈は耐え難い激痛に泣き叫び、拓人に許しを請う。痛みは彼が動く度に繰り返されるのだ。
「拓人さん、お願い。もう止めて、許して。これ以上、堪えられない」
　この痛みが少しでも早く終わって欲しい。そう願いながら、愛奈は更にそれから長い間、拓人に蹂躙されねばならなかった。

明け方、ついに愛奈はか細い啼き声を上げながら失神した。一晩中、処女を失ったばかりの痛みを訴え続ける身体を抱き、拓人は無情にも陵辱の限りを尽くしたのだ。

その翌日も愛奈はその部屋で一日中、拓人に抱かれ続けた。最初は拓人がズボンの前をくつろげ猛り狂った一物を見せる度に怯えていた愛奈だった。だが、純潔を失った痛みが徐々に薄れ、代わりに快感が彼女の感覚を支配し始めるようになると、その怯えもなくなっていった。

三日間に渡ってホテルの一室ではあらゆる陵辱が行われた。四日目の朝、拓人は愛奈を別の場所に移した。そこは彼の勤務するアーク本社ビルにもほど近く、深夜まで会社で溜まった仕事を片付ける際、彼は自宅に帰らずにここに泊まることが多かった。

もっとも、愛奈と暮らすようになってから、殆どこちらに寝泊まりすることはなく、彼は毎日、自邸から通勤して、どんなに忙しくても時間がなくても定時には帰宅していた。彼の心を自宅に繋ぎ止めたのはもちろん、彼の欲してやまない可愛い小鳥の存在であった。

拓人は会社近くに借りた高級マンションの一室に愛奈を監禁したのである。ご丁寧に控え室となった一室には常に黒服の男が二人、常駐した。むろん、愛奈が逃げないように厳重な監視下に置くためであった。　　そんな状態で逃げ出せるはずもない。また、一室に閉じ込められての連日連夜の荒淫は次第に愛奈から逃げようとする気力まで奪っていった。愛奈が狭い一室に閉じ込められてすることといえば、暇があればやってくる拓人に抱かれることだけ。後はただ三度運ばれてくる食事に気まぐれに箸をつける以外、何もすることはなかった。

高校の担任大木先生からは拓人の家に毎日のように電話がかかっていたが、拓人は愛奈は病気で療養させているとしか応えない。大木先生はならばひとめ顔を見たいから見舞わせて欲しいと申し出ても、拓人は頑として受け付けない。最早、拓人が愛奈をどうかしているとしか思えなくても、愛奈の保護者であり血縁でもある拓人に逢わせないと言われれば、どうしようもない。

もちろん、監禁されている愛奈がこんな経緯を知る由はない。今の彼女にとっては男に抱かれるのを待つだけがその生活のすべてであった。

あの日、鳳彩ホテルの遊廓を模した一室に連れ込まれてレイプされた夜を境にして、愛奈の生活は一変した。今や愛を育むべき場所の寝室が愛奈の鳥籠になった。拘束されて身の自由を奪われて抱かれることが愛奈の興奮を増幅し官能を高める。

そのことを知った拓人は愛奈の両手を縛りつけた状態で、よく愛奈を抱いた。時には派手な色柄の長襦袢を彼女に着せ、その裾を腰まで絡げて四つん這いにさせて、背後から貫いたりもする。

どうやら拓人は昔の遊廓風のシュチエーションで女を抱くのが好みらしく、マンションでもよくそういった和風の趣向で愛奈を抱いた。そのため、彼女の手を縛るのはいつも着物を着るときに使う腰紐だ。

拓人は毎日、愛奈を抱くためにマンションを訪れる。それ以外の時間は薄いネグリジェしか身に纏うことを許されない。最初にその薄物を見たときにはショックで言葉を失った。蝶の羽根のように薄いベビードール風のネグリジェは夜着というよりは、どう見ても下着でしかなかったからだ。

しかもネグリジェの下には下着を着けることもできない。用意されたのは一枚きりだった。

―これを着ろと言うの？

愛奈の小さな顔は絶望と失望に駆られて蒼白になった。思わず縋るように拓人を見上げると、彼は事もなげに頷いた。

―もちろんだ。

―せめて下着は付けさせて。

こんな男に願い事なんかしたくなかったけれど、これではあんまりだ。透ける素材のネグリジェは殆ど衣類としての機能を果たさないだろうことは明白だ。下着を付けなければ、身体の線はすべて露わになってしまうだろう。

―駄目だ。

拓人は無情に言い放ったどころか、

―早速、着てみろよ。

と、傲岸に命じてきた。
―いやよ。
愛奈は頑なに拒否した。だが、結局、いつもどおりで、この男には逆らえないことも判っていた。拓人の命じることに逆らえば、この後、大抵は腰が立たなくなるまで執拗にベッドで責め立てられることは判っていた。そうなると、幾ら許しを請うても、彼は容赦ない陵辱魔と化す。
辛い折檻のような性交がいやならば、拓人の命令を受け容れるしかない。愛奈は拓人の前で衣服を脱ぎ、薄いネグリジェに着替えた。もちろん下着は付けていない。拓人の愛撫を受けるようになってから、更に丸みを帯びて豊かになった乳房から下肢の淡い茂みまでがすべて透けてくっきりと見えた。
拓人の視線が次第に燃えるような熱を孕んでいくのがはっきりと判る。熱を帯びたまなざしが身体の隅々を視姦する。堪らないほどの羞恥を感じるのに、何故か身体ははっきりとした反応を示すことに、愛奈は戸惑いを隠せなかった。
拓人の烈しいまなざしに射竦められ、胸の突起はつんと勃たち上がり、固く凝った。下肢のあわいの蜜口は直にしっとりとした蜜を湛えて溢れんばかりになった。自分の身体のすべてが男の欲情にまみれたまざしによって、淫らに反応していることが信じられなかった。
男に吸って欲しい弄って欲しいとねだるように乳房の先は甘く疼き、幾度となく男の剛直を受け容れた蜜壺は早くいつものように雄々しく反り立った彼自身で奥の感じやすい場所を貫いて欲しいと焦れている。みっしりとした彼の一物で蜜道を埋め尽くして欲しいと空虚さにひくついて彼を求めている。
―こっちにおいで。
愛奈はふらふらと誘われるままに拓人に近寄った。拓人は愛奈の腰に手を回して引き寄せ、頭を下げて薄い夜着越しに彼女の乳首を吸った。
―ぅうっ、あぁ―。
いつしか愛奈は拓人に胸を吸われながら、更にもっと吸ってと求めるように胸を突き出し、腰を艶めかしく揺らしていた。
―そうか、愛奈は胸だけでなく、こっちも触って欲しいのか。本当に嫌らしい身体になったんだな。
拓人は嬉しげに言い、その後はいつもにも増して愛奈は彼に翻弄されまくった。昼過ぎにマンションに来た拓人はその日は結局ずっと愛奈を抱いて過ごし、夜もそのまま泊まり、翌朝、そこから出社した。
愛奈はノートの余白に鉛筆でまた一つ棒線を引いた。拓人に頼んで与えられた大学ノートにはもう正の字が二つ並んだ。そして今は三つ目の途中だ。明日で丁度、〝正〟が三つになる。
つまり、今日は愛奈がこのマンションに閉じ込められて十四日経ったということでもある。愛奈が閉じ込められている寝室には必要最低限のものしか用意されていない。カレンダーはもちろんないし、テレビもない。
ここに来るときに来ていた服も下着もすべて持ち去られてしまった。普段は下着もつけずに薄物の夜着一枚きり、裸同然で過ごすのだから、箪笥も要らない。

本などは読みたいものがあれば差し入れてくれると拓人は言ったが、男に抱かれるだけの日々で読書する気も失せた。どうしても大学に進む夢は棄てられず、せめて勉強だけはしたいと願い学校のテキストや参考書を返して欲しいと頼んでも、それはことごとく却下された。

拓人は本当に愛奈をここに閉じ込めておくつもりなのだとその時、初めて男の真意を知った。それまでは時期が来れば、ここを出して貰えると一縷の望みを抱いていたのだ。

この部屋にあるのは拓人に抱かれるためのの大きな寝台と一枚の鏡だけ。鏡は全身が映るくらいの大きなものだ。これは時折、行為の様子を愛奈に鏡に映し出して見させるためのもの。

嫌がる愛奈にこれを見せると、羞恥と興奮で更に官能が高まり、彼自身を愛奈の蜜壺が締め付ける。そのことを彼はよく知っている。既に何度も愛奈を抱いた彼は愛奈自身よりも彼女の身体の秘密を知り尽くしていた。

そして、ここが愛奈にとっては今の世界のすべてであり、彼女が飼われている鳥籠だった。

　自分は一体、何のためにこの世に生まれてきたのだろう。こうして翼をもがれた小鳥のように閉じ込められ、男の快楽のために日々、身体を投げ出し、慰み者になるために？　夢も自由もすべて奪われ、飼い慣らされたペットのようになるために？
　拓人が父の借金を完済してくれた時、愛奈は恩人の拓人のためなら何でもすると誓った。しかし、あの時、愛奈が考えたのは、こんなことであるはずがなかった。一室に閉じ込められ、ひたすら拓人の性欲の捌け口として彼に奉仕を続けなければならないなんて、想像の限界をはるかに超えていた。
　考えていると涙が込み上げてきて、大粒の雫が頬をつたい落ちた。その時、寝室のドアが開いた。拓人が来たのだと振り向かずとも判る。
　背後に人の気配を感じる。後ろからそっと腰に手を回して抱きすくめられ、一瞬、愛奈は身を固くした。数え切れないほど抱かれて、身体は彼の愛撫の虜になってしまった今でも、こうして最初に触れられるときだけは拒絶反応が出てしまう。
「これを脱ぎなさい」
　冷えた声が命令する。逆らっても無駄なことだ。愛奈は言われるままに薄物のネグリジェを脱いだ。はらりと、蜻蛉の羽根のような夜着がフローリングの床に落ちる。
　拓人は美しい面に天使のような気高い笑みを浮かべた。彼がそんな表情(かお)をするときほどより残酷になるのを愛奈はよく知っている。しかし内心の怯えを見せると余計に彼の嗜虐心を煽ってしまうので、敢えて感情は見せないように心がけている。
　拓人はダブルベッドに腰を下ろし、愛奈に手招きした。更に自分を跨いで座るように指示を出す。愛奈は一瞬、息を呑んだけれど、すぐに表情の変化を消した。、言われたように大きく両脚をひらいて彼に向かい合う形で彼の膝に座った。
「そう、良い子だね」
　愛奈が従順に命令に従うと、拓人も機嫌が良い。丁度、胸の辺りが拓人の顔の前に来ている。拓人は誘うようにかすかに揺れる豊満な乳房をそっと両手で下から掬い上げるように持ち上げた。しっとりとした重みを堪能するようにゆっくりと揉み込む度に、愛撫を施されるようになって更に大きくなった乳房が彼の手の中で淫猥に形を変える。
「美味しそうだね。ここが食べてと言っている。どれ、味わってみようか」
　言い終わる前に、薄紅色の突起は彼の生暖かい口中に銜えられていた。クチュクチュと赤児が吸うように吸われている中に、乳首が固さを持ってくる。舐められ、舌で弾いてまた舐められると、思わず声が洩れるほどの快感が弾けた。
「愛奈はここを吸われるのが大好きなんだよな」
　ひとしきり胸を吸われた後、拓人が美しい微笑みを見せながら満足げに言う。
「この間は胸だけで達ってしまったのに、今日はまだなのか？」
　この男はまさに天使の仮面を被った悪魔だ。優しい顔、穏やかな声音でどこまでも残酷なことを言う。
「俺の肩を持って膝で立ってごらん」
　愛奈は素直に言うとおりにする。拓人は頷き、いっとう優しい声音で告げた。

「今度はそのまま腰を落として俺の上に座るんだ」
　この体位は以前も何度かしたことがあるので、どうなるかは判っている。だが、結合が深くなる分、得る快感があまりにも烈しくなってしまう。できれば避けたい体勢ではあった。
「どうしたの、やってごらん。気持ち良くなれるだろ」
　やや苛立ちのこもった声に、愛奈は覚悟を決める。ゆっくりと彼の上に腰を落としていくと、やがて固い楔が蜜口に当たり、そこはいともあっさりと剛直を飲み込んだ。さんざん彼に貫かれた場所だ。
「うっ、あぁ」
　半ばほどまで身体を沈めただけで、もう下肢をじんわりと快感が支配してくる。と、拓人がいきなり下から一挙に最奥まで貫いた。
「あ？　あうっ、あーっ」
　あまりの衝撃に眼の前が真っ白に染まり、閃光が点滅する。更に続けざまに奥壁を突かれ、愛奈はガクガクと糸の切れたマリオネットのように下から揺さぶられた。
　下から深々と彼自身を銜え込まされているため、いつもとは違う最も感じやすい箇所に剛直が当たり、耐え難いほどの快感が最奥の膣壁で立て続けに弾ける。
「もう駄目、許して。これ以上したら、本当に壊れちゃう」
　早く達してくれれば良いのに、こんなときに限って、拓人はいつまでも果てず延々と下から彼女の感じやすい場所を狙い澄まして突き上げてくる。
「や、いや。壊れるから、もう止めて」
　うわ言のように喘ぎながら呟く愛奈からはすすり泣きのような声が洩れ続ける。
「壊れれば良い。俺に抱かれて壊れてごらん」
　そうすれば、お前はもう二度と俺の側から飛び立とうとはしないだろう、可愛い俺の小鳥。
　拓人はすすり啼く愛奈の耳許に濡れた声を注ぎ込む。
　果てしなく続くかと思われた情事にも終わりは訪れる。拓人の動きが性急になり、彼も余裕がなくなってきたと思われる頃、愛奈の中に入っていた彼自身が大きく膨らみ弾けた。
　生暖かい液体が感じやすい奥の膣壁を余すところなく濡らしてゆく。彼の放った液が滲み込んでゆくのにも我慢できないほどの快感を感じ、愛奈は華奢な身体を震わせ、すすり啼いた。
「良いの、とっても気持ち良い」
　拓人の狂気が乗り移ったかのように、愛奈もまた、どこか壊れてしまったのかもしれない。次に正気に目覚めた時、自分が演じた痴態がどれほどのものかを悟り、死んでしまいたい、この世から自分という存在を消し去ってしまいたいほどの絶望を感じるのは常のことだ。
　既に女が陶酔状態から醒めているとも知らず、拓人はいまだ忘我の境地を流離(さすら)っているようであった。自分が放った精液を愛奈の中により深く滲み込ませたいとでもいうかのように、ゆっくりと腰を押し回し、彼女の感じやすい内壁が彼自身を締め付ける気持ち良さを未練がましく貪っているのだ。
　情事の直後、愛奈はいつも烈しい自己嫌悪に陥った。自分は一体、ここで日々、何をしているのだろうと。鳥籠に閉じ込められ、ここで男に抱かれるのを待つだけの怠惰な日々。得るものは

何もない、この状況で。
　本当にこのままで良いのだろうか。生活の、いや人生のすべてが肉欲の交わりだけに支配される日々を受け容れていて良いのか。自身に問いかける。一良いはずはなかった。
　かつて自分には夢があった。大勢の子どもたちに囲まれ、オルガンを弾いて一緒に歌ったり、運動場で追いかけっこをしたり一、そんな自分を夢見ていた。だが、今の自分は何をやっているのか。これで良いはずがない。
　変えなければ。皮肉なことに、拓人に烈しく求められれば求められるほど、その交わりが濃いものであればあるだけ、愛奈は抱かれた直後に、かつて追い求めていた夢を再び心に思い浮かべるのだ。男の腕の中で淫らに喘ぎ身をくねらせ乱れる自分を消してしまいたいほど恥ずかしいと思う。
　このままでは、私は駄目になってしまう。その一心が愛奈を突き動かした。
「お願いがあります」

拓人が漸く自分の中から出ていった後、愛奈はか細い声で言った。拓人が〝おや〟といった表情で彼女を見やった。
「何だい？　何か欲しいものがあるの？」
　愛奈は拓人を真っすぐに見つめた。こんな風に彼を真正面から見るのは随分と久しぶりのような気がした。
「高校に行かせて下さい」
「ー」
　ハッと彼が息を呑むのが判った。ここ二週間というもの、ひたすら大人しく彼に抱かれ続けた愛奈はまさに従順そのものだった。性の奴隷ーもっとも、たとえどのように言葉で言い繕おうとも、今の愛奈はそうとしか呼びようがない状態だーという形容がふさわしくなければ、彼の巧みな性技の虜になっているといえた。
　それが唐突に予想外の科白を突きつけられ、彼の端正な面に驚愕の色が浮かんでいた。
　宙で二人の視線が絡み合い、離れた。その瞬間、拓人は愛してやまない女の瞳に、けして何ものにも曲げられない強い信念を見たのだった。
　思えば、彼が愛したのはこの不屈の精神(こころ)、何が起ころうとも、絶対に折れることのない強くしなやかな気性だったのかもしれない。たおやかに咲き誇りながらも、どんな風にも折れることのないヒナゲシの花のような少女を彼は愛したのだ。
「ーなるほど、それでこそ愛奈だな」
　拓人が言い、フと笑った。物問いたげな愛奈に向かって、彼は淡く微笑った。
「俺は素直に身を任せる愛奈も好きだが、以前のように泣いたり笑ったりするお前の方が良い。強くて意地っ張りで、何ものにも屈さないお前を俺は欲しいと思ったんだ」
　そう、自分が欲しいと望んだのは、どんな卑怯な手段を使ってでも手に入れたいと望んだのは人形のように言いなりになる性の玩具ではなかった。風にゆらめく七色の光のようにくるくると表情の変わる少女の眩しさを彼は愛したのだから。
　その時、拓人の脳裏に去来した想いを愛奈は知らなかった。容易く願いが聞き届けられるとは思ってはおらず、ただひたすら息をつめて男からの返答を待った。
　永遠とも思える沈黙の後、拓人が口を開いた。
「良いだろう、どうせあと一年もないんだ。せめて高校は卒業しないとな」
　愛奈は弾かれたように顔を上げた。まさかこう容易く承諾を得られるとは考えていなかったのだ。
　だが、と、拓人が愛奈を強いまなざしで絡め取る。
「このままでというわけにはいかない。俺の歓ぶことを愛奈がしてくれたら、高校には今までどおり行かせてあげよう」
「拓人さんの歓ぶこと？」
　小首を傾げた愛奈に、拓人が頷いて見せた。
「判らないわ」
　しばらく考えても、応えは見つからなかった。途方に暮れてまなざしで訴えかけると、拓人が

小さく含み笑う。
「相変わらずのねんねだな。どれだけ俺に抱かれても、お前は無垢なままだ。いや、身体の方だけは俺好みの嫌らしい身体に見事に開発されたか」
　わざと愛奈の羞恥を煽るような言い方をする。
「それなら、教えてやろう。その愛らしい口で俺を歓ばせるんだ」
　それでも愛奈は、まだ、きょとんとしている。拓人は小さく肩を竦め、いまだつくろげたままの下肢を指さした。愛奈の小さな顔が見る間に強ばってゆく。
「まさかー」
　拓人は愛奈の反応を心底から愉しむかのように微笑む。
「そう、お前の考えているとおりだよ。これまで俺は色んなことをお前に教えてきたが、そろそろレッスンも次の段階に進んでも良い頃合いだろう。女はベッドの上では男に与えられるだけではいけない。さあ、ここに来て、やってごらん」
　愛奈は拓人の前に跪いた。ズボンの股間からはあれほど烈しい営みを重ねたにも拘わらず、いまだ大きさを保った彼自身がそそり立っていた。
　この男は、これを舐めろというのか。
　愛奈にとっては到底、従いがたい要求であった。今、天を向いて屹立していたこれは、愛奈にとっては排泄器官でしかない。けれど、この命令を拒めば、高校に行けなくなる。
　愛奈は瞳を閉じた。閉じた眼を開けば、涙がこぼれてしまいそうだ。でも、こんな男の前では涙ひと粒も見せたくはなかった。
　意を決して眼を開き、顔を彼自身に近づける。
「どうしたら良いのか、やり方が判らないわ」
　どうしても声が震えるのはこの際、致し方なかった。
「俺の言うとおりにやるんだ」
　愛奈は彼の命令どおり、まずは竿におずおずと舌を這わせた。それから先端を口に含み、縁を描くように舐めてみる。亀頭の窪みを舌先でつつくと、拓人は小さなうめき声を洩らし腰を揺らめかせた。
「なかなか上手いじゃないか。お前はやはり、生まれながらの娼婦だな。お前の身体も何もかもが男を歓ばせるために存在しているんだ、愛奈」
　拓人の声には抑えがたい情欲の焔が点っている。たどたどしい舌遣いがかえって彼をそそったことを愛奈は知らない。夢中で屹立を舐めている中に、先端から酸っぱいようなほろ苦いような液体が滲み始めた。
「見てごらん。お前が俺のを銜え込んでいるところが見える」
　ふと、その言葉に何気なく視線を動かした愛奈はあまりの衝撃に息を呑んだ。
　数メートル前方に設置された大きな鏡には、まさに今の二人の姿がくっきりと映し出されている。拓人の方は背広の上着こそ脱いでいるものの、ワイシャツも着ているし、ズボンも履いたままで股間をくつろげているだけだ。服を着たままの彼に対し、愛奈だけが一糸纏わぬ生まれたままの姿になっている。

拓人の足許に跪いて懸命に奉仕する自分の姿はあまりにも屈辱的で惨めで、淫らだった。
ショックに顔から血の気が引いていくのが判った。しかし、そんな反応すら、彼を歓ばせるための趣向でしかない。
「初めてにしては上出来だ。よくできたご褒美に今度は俺が愛奈を気持ちよくさせてやろう」
打ちのめされている愛奈に最早、逆らうすべはなかった。拓人は愛奈を軽々と抱き上げ、ベッドに押し倒す。すかさずその上に覆い被さると、烈しく唇を貪った。それから両脚を膝を立てた状態で大きく開かせる。
「拓人さん、何を一」
何をするのかと不安げな声を出した愛奈を拓人は宥めるようにその太腿を撫でた。
「何も考えなくて良い。いつものようにただ俺を感じていてくれ」
ふいに尖らせた舌先が彼女の蜜壺に挿入され、愛奈の身体がピクンと跳ねる。
「あ？　拓人さん、そこは」
いやと言おうとして、また身体がビクビクと立て続けに撥ねた。生まれて初めて与えられる刺激はあまりにも強すぎるものだった。これまで指を挿れられたことはあるけれど、舐められたことなどなかった。
「いや、止めてっ。汚いから、そんなところは」
暴れる愛奈の両脚を力をこめて押さえつけ、拓人が濡れた声で呟く。
「汚くなどないさ。さっき、愛奈も俺のを舐めてくれただろう。愛し合う男と女の間には汚いなんて言葉はない。何をしてもされても、極上の快楽になるだよ。よく憶えておきなさい」

拓人は愛奈の蜜壺を舌で刺激しながら、快感に膨れ上がっている花芽を指先で捏ね回す。何度も続けている中に、いつものあの感覚一身体の奥底から湧き上がってくるうねりを感じた。
「あっ、あっ、来ちゃう」
「達けば良い。思いきり感じて達ってごらん」
耳許に熱い息が吹きかけられる。蜜壺のとりわけ感じやすい部分を更に舌で嬲られ、愛奈は絶頂に達した。
「俺ももう我慢できない」
愛奈はまだ絶頂の余韻にいた。そんな彼女の両脚の間に座り、拓人は彼女の片足を高々と持ち上げ肩に担ぐ。
「ぅぅ一うっ、あ、ぁあ」
いつもとは違う内壁の場所を鋭い楔が穿ってゆく。幾度もすり上げられ、犯される。いきりたった剛直が狭い蜜道を何度も通過する度に、あらゆる箇所が刺激され、愛奈は甘い声で啼いた。
堕ちていく。どこまでも堕ちていく。
「堕ちる、堕ちてしまう」
達したばかりなのに、また小さな絶頂が来る。何度か達した後に訪れたのは、かつてないほどの大きな波だった。大きなうねりに呑み込まれ、愛奈は好きなように翻弄される。
「堕ちれば良い。堕ちておいで、俺の腕の中に」
そして二度と飛び立つことができないように、この鳥籠から逃げられないように、俺が底なしの快楽という鎖で永遠にお前の翼を縛り付けてあげる。
耳許で囁かれた男の口調は夢見るようで、どこか倒錯的な熱さえ帯びていた。そして、愛奈の最も敏感な最奥で男の熱が弾ける。ビュクビュクと飛び散る飛沫に奥を濡らされながら、愛奈はその烈しすぎる快感についに意識を手放した。
Ｗａｋｉｎｇ（めざめ）
その二日後、愛奈は十六日ぶりに登校した。本当は昨日から登校しても良いと拓人に言われたのだが、前日にあまりにも烈しく愛を交わしすぎたために、翌日は一日中、ベッドから出られない状態だったのだ。腰が立たなくて、その日はずっと寝ていなければならない有様だった。
流石に可哀想に思ったのか、昨夜は拓人も訪ねてはこなかった。久しぶりに広いベッドで手足を伸ばして寝(やす)めたせいか、身体も心もいつになくすっきりと感じられる。
自分のここのところの生活がいかに拓人という男に支配されていたかを改めて思い知らされた。
クラスメートたちの態度は特に変わらなかった。二週間余りに渡っての欠席は、病気療養中と届け出られていたようだ。友達はそれを信じて疑っていないようで、親友の満奈実ですら
「入院してたんだって、大丈夫？」
と気遣ってくれる始末だった。しかし、それも当然といえばいえた。そういう愛奈だって、これが我が身に起こったことでなければ、小説かドラマの中の出来事でしかあり得ないと思うだろう。
現実世界に女子高生を監禁して、ペットのように飼い慣らし性の道具扱いする男がいると誰が

考えるだろうか。
　だが、担任の大木先生だけは真実を知っているらしかった。授業の合間にも時々、物言いたげな眼を向けてくるが、かといって、直接話しかけてくることはもちろん、拓人との関係や欠席していた理由について訊ねてくることはなかった。
　ただ放課後、廊下ですれ違ったときに大木先生は悔しげに言った。
「校長から安浦の家庭の事情については余計な口出しは控えるようにと言い渡されてしまったんだ。生徒の家庭のことにまで教師が干渉するのは越権行為だと君の従兄から陳情があったようでね」
　つまり、拓人が何かと目障りな大木先生に校長を通じて牽制したということだろう。
「先生、私なら大丈夫、何とか自分の力で乗り切ってみるから」
　気丈に言い切った愛奈に、大木先生はやるせなさそうな顔で頷いた。
「担任なのに、何も力になってやれなくてごめんな」
　その何かに耐えるような表情がつい先日、哀しい別離をしたばかりの反町君と重なる。反町君もこんな風に辛そうな顔で〝ごめんな〟と何度も繰り返した。
　本当は謝らなければならないのは愛奈の方なのに、彼は謝ってくれた。しかし、反町君が悪いわけではないし、大木先生が教師として力足らずなのでもない。
　拓人は日本国内だけでなく海外にもその名を轟かせる大企の社長で、社会的にあまりにも影響力がありすぎるし、力を持っている。
　そんな拓人に彼らが敵うはずもないのだ。そのことを愛奈は誰よりよく知っていた。
「明日もまた頑張って登校します」
　愛奈が笑顔で挨拶すると、大木先生は泣き笑いのような顔で頷いた。
「待ってるぞ」
　愛奈は心からの感謝を込めて大木先生に頭を下げた。
　けれど、拓人は知らない。誰よりも権力を持っているからといって、けして人の心は力や金で手に入るものでも自由になるのでもないことを。
　拓人が愛奈に執着し彼の側に繋ぎ止めておこうとすればするだけ、愛奈の心は彼から離れてゆくのだ。ホテルに連れ込まれてレイプされた夜、愛奈の中で〝大好きで優しい従兄〟は死んだ。今、愛奈を籠の鳥のように飼い慣らしているのは彼女の知らない、ただの冷酷で女好きの若社長にすぎない。
　久しぶりに登校したその日は流石に疲れた。思えばずっと心身ともに疲労しっ放しだった。昨日を除けば、拓人が来ない日はなく、従って必然的に日毎、夜毎、愛奈は彼に抱かれてばかりいたのだ。
　登校は許されたものの、電車での通学を拓人は最後まで認めなかった。送迎を車でという条件付きでの通学だ。今日の放課後だって、黒塗りの高級車が校門前に横付けされ、生徒たちの間ではちょっとした騒ぎになっていた。
―運転手つきのお迎えだなんて、どこのお嬢さまなの？
　女子生徒たちがひそひそと囁き交わす中、愛奈は恥ずかしさに消え入りそうになりながら迎え

にきた車に乗った。もちろん、運転手はあの黒服のボディガードだ。
　普段、彼ともう一人の男がマンションに詰めて愛奈の監視役を務めている。三度の食事を運んできてくれるのも彼らだ。もちろん、愛奈と彼らの接触は必要最低限でしかない。
　毎日、決まった時間に部屋の前にトレーに載った食事が置かれていて、その時間だけ外から鍵が外される。愛奈がそのわずかな時間内でトレーを受け取ると、すぐにまた施錠される。次の食事時間になるとまた同じように施錠が一時的に解除されるので、食べ終わった前のトレーを戻し、代わりに新しいトレーを受け取る。そんなことの繰り返しだ。
　だから、愛奈が男たちの姿を見ることはなかった。独占欲の強い拓人がまた彼らに愛奈と接触することを許しているとは思えなかった。
　マンションに到着早々、愛奈は頭痛を憶えた。愕くことに、留守中に拓人が来ていた。
「久しぶりの学校はどうだった、愉しかったか？」

　部屋のドアを開けた時、拓人は窓辺に佇み、外の景色を眺めているようだった。この部屋は八階にある。中規模どころの地方都市なので、都会のような高層ビル群がそうそうあるはずもなく、窓から見える景色といえば、ミニチュアのように小さく見える町と蒼い空だけだ。
「ーええ」
　愛奈は疲れた声で短く応え、よろめくようにベッドに腰掛けた。拓人はそれを勘違いしたようである。顔をほころばせ、近寄ってきた。
「やけに積極的だな。一晩、俺に抱かれなかったのがそんなに淋しかったか？」
　勘違いもはなはだしかったが、いちいち訂正するだけの気力も残っていなかった。それが余計にいけなかったのだ。
　早速手を伸ばしてきた彼を、愛奈はつい無意識の中に押しのけようとしてしまった。
「何だ？　俺を拒むのか」
　拓人の声が一段低くなった。ハッと我に返ったときはもう遅かった。
「ごめんなさい、頭が痛くて」
　せめて今日だけは勘弁して欲しい。そんな想いを言外に込めて拓人を見つめる。しかし、拓人の整いすぎるほど整った顔がさっと蒼褪めた。
「たまにはゆっくり休ませようと昨夜、抱かなかったのが悪かったのか」
　違う、そうじゃない。そう言おうとした言葉はいきなりのキスで塞がれた。噛みつくような奪うようなキスは荒々しく、まるで懲らしめのようだ。
　拓人は自らがベッドの淵に座り、愛奈を後ろ向きに膝に乗せた。愛奈の背中が拓人の逞しい胸板に当たっている。キスで息も絶え絶えの愛奈はなされるがままになるしかない。
　彼はそのままの体勢で愛奈の制服のスカートを大きく捲り上げ、自分もズボンの股間をつくろげ、既に大きくそそり立つ彼自身を解放した。
　愛奈の小さなピンクのビキニパンティを乱暴に引き下ろし、ひと息に背後から貫く。
「ーっ」
　物凄い衝撃に、愛奈の身体が大きく仰け反った。意識が瞬間的に飛び、声すら出ない彼女を拓人は縦横無尽に突き上げる。拓人の方は準備万端だったが、愛奈はまだ愛撫どころか前戯すら与えられていなかった。
　殆ど濡れていない状態でいきなり深々と下から刺し貫かれたのだから、堪ったものではない。いつもならたっぷりと際限なく与えられる快楽など今日は微塵も感じる由はなく、あるのは狭い膣道を無理にこじ開けられる苦しさ痛みだけだ。
「くっ、あれだけ抱いたのに、一晩抱かなかっただけで、もう逆戻りか」
　拓人は苦しげに呻いたが、やがて、抜き差しを繰り返していく中に、愛奈の胎内も少しずつ蜜が出て幾分かは挿入しやすくなったようである。
「まあ、これはこれで初夜のときのようで悪くはないな。それにしても、お前の中は狭いな。おい、そんなに締め付けないでくれ。俺を食いちぎるつもりか？」
　もちろん、愛奈にはまったく自覚がないのだが、時折、愛奈が彼を締め付けるらしい。それがまた彼には心地良いらしく、最初はきついと不満げだった彼はすぐに気持ちよさげに腰を使い始

めた。
　あるときは腰を大きく回し、あるときは殆ど抜けそうなほど引いて、そこから一挙に最奥まで刺し貫く。多彩な腰の動きは愛奈を翻弄し、彼女もまたいつしか苦痛は過ぎ去り、感じるのは快感ばかりになっていた。
「あ、ああっ、そこはいや、いやなの。感じすぎから駄目」
　啼きすぎて声も嗄れてしまって、自分が何を口走っているのかも判らなくなりつつある。今の愛奈を突き動かしているのは感情でも心でもない。人間がまだ原初の生物でいた大昔そうであったように、ただ肉体の欲望に忠実に動いているだけだ。
　それは拓人も同じだった。
「愛奈、ほら、あれが今のお前の姿だよ。何て淫乱で色っぽくて可愛らしいんだろう」
　拓人に促されるようにして眼前の鏡を見れば、拓人の膝に乗っている自分がいる。今日は幼児が大人に後ろから抱きかかえられ小水をしているかのようなポーズだ。
「いやっ」
　あまりの痴態に愛奈は思わず顔を背けた。
「眼を背けては駄目だ。これが今のお前のありのままの姿なんだから。よおく見るんだ、お前のあそこが俺を嫌らしく銜え込んでいる。見えるか？」
　赤黒いグロテスクな肉塊が愛奈の蜜壺をゆっくりとと出入りする様がはっきりと鏡に映し出されている。信じられない光景に、愛奈は涙を滲ませた。
　もう、このまま死んでしまいたい。本気でそう思った。しかも今日は高校から帰ったばかりなので、夏の制服姿だ。制服を着たまま、こんな格好で犯されるなんて、それこそ下手なアダルトビデオに出るＡＶ女優みたいではないか。
　こんな自分を見るなんて、いやだ。この残酷で悪夢のような光景が本当に悪い夢であれば良いのにと願った。
　耳裏をネロリと熱い舌が這う度に、愛奈の蜜壺が烈しく収縮して彼を締め付ける。
「お前の中は熱くてよく閉まって、何て気持ち良いんだろう。もう堪らない」
　拓人の動きが烈しくなり、腰遣いにも声にも余裕がなくなった。後はもういつものように烈しく突き上げられるだけ突き上げられ、最後に彼は身を震わせて吐精して、悪夢のような情事はそれで終わった。
　拓人はそれからほどなく慌ただしく出かけていった。明日から長期の出張に出るとのことである。
「何か土産を買ってきてやるから、大人しく良い子にしてるんだぞ」
　と、かける言葉だけは優しく、まるで子どもに対するようなものだった。しかし、彼の愛奈にする扱いはあくまでも大人のものであり、しかも彼女の意思を頭から無視した強要される行為ばかりであった。
　愛奈はそれに対して返事もせず、ベッドにうち伏したままで見送りもしなかった。半分は卑劣な男に返事なんかするものかという意地と、もう半分は冗談ではなく本当に身体が辛くてベッドから起き上がれなかったせいもある。

拓人から受ける荒淫は想像以上に、愛奈の心と身体を傷つけていた。
ーあんな男、この世からいなくなってしまえば良い。
愛奈は溢れる涙でシーツを濡らしながら、自分の身体を慰みものにする男を憎いと思った。
翌日はまた学校を休んだ。少し動いただけで、腰に鈍い痛みが走って動けない。昨日の乱暴な営みが原因なのは判っていた。午前中、ベッドに潜り込んでうとうとと微睡んでいた時、枕許のケータイが鳴った。
エグザイルのチューチュートレインが鳴りだし、愛奈の意識は浅い眠りの淵から浮上した。

「ーもしもし」
　幾分くぐもった声音で話すと、深いバリトンの声が聞こえてくる。
ー今、どこにいる？
「マンション」
　応えてやりたくなどないが、それもできない立場が口惜しい。
　意外そうな声が返ってきた。
ー学校は行かなかったのか？
「腰が痛くて、歩くのもやっとなの。登校なんて無理よ」
　電話の向こうで小さく笑う声が聞こえた。
ーなるほど、そういうことか。やはり、お前を大人しくさせておくには抱いてやるのがいちばんみたいだな。
　誰のせいでこんな風になったと思っているのか。そう罵ってやりたかったが、グッと込み上げる怒りを抑えた。
「何かご用？」
　わざと馬鹿丁寧に訊ねてやっても、相手には一向に通じていない。
ー廊下を見てみろ。そろそろ食事時だろ、俺がいなくても食事はきちんと取れよ。身体を休めるのは良いが、食事も忘れて眠りこけるのは感心しないからな。
　愛奈が応えないので、しばらく沈黙があり小さな溜息が聞こえた。
ー今は飛行機の中だ。
　誰もそんなこと訊いちゃないわよ。
　心の中でまた悪態をついてやる。
ー俺がいなくて淋しいだろうが、良い子で待ってろ。帰ったら、それこそまた腰が立たないくらいに何度でも抱いてやる。
　そのときだけハッとするような艶めいた官能的な声音になった。男の色めいた声を聞いただけで、カッと身体が火照った我が身がつくづく情けない。気のせいか、下肢がわずかに濡れているような気もするが、それは考えないことにした。
　それで電話は向こうから切れた。
「あの助平、変態、鬼畜、淫乱レイプ男」
　思いつく限りの言葉で罵倒してみても、心はいっかな晴れない。とりあえず廊下を見てみようと痛む腰を庇いながらベッドから出る。案の定、ドアは施錠が外されていた。そっとドアを開けると、いつの場所にはトレーと小さなバスケットが置いてある。
「何？」
　バスケットとトレーを持ってまたゆっくりと時間を掛けてベッドに戻った。ひとまずトレーを側に置き、先にバスケットを開けると、途端にミャーと真っ黒な猫が顔をちょこんと出した。
「お前」
　愛奈は歓声を上げた。黒猫のエメがつぶらな瞳をキラキラさせて愛奈をじいっと見つめている。

「エメ、元気だったのね」
　愛奈は両手を伸ばして子猫を抱き上げ、胸に抱きしめた。ミャアとエメも甘えた啼き声を上げて愛奈のふくよかな胸に顔をすりつけた。
　拓人が留守中も、着ることを許されているのはこの部屋では透ける薄物の夜着だけだ。子猫が甘えて胸に顔をすりつけてくると、あろうことか、愛奈の乳房の先端がこすられて固くなった。
「やだ」
　愛奈はあまりのことに唇を噛んだ。
―私の身体、本当にどうかしちゃったのね。
　快感なんて何も知らなかったこの身体をここまで淫らに作り変えたのは拓人だ。一日に幾度も抱かれ、泣いて許しを請うまで徹底的に犯され続けた。
　もう、自分が昔の無垢だった頃に戻ることは二度とないのだろう。それを思うと拓人が堪らなく憎く恨めしかった。
　そこで、はたと気づく。それにしても、何故、子猫が突然、戻ってきたのだろう。ネットカフェで拓人に連れ去られて以来、エメとは離れ離れになってしまった。元々野良の子だったのだし、自分は籠の鳥のようにここに閉じ込められたきりだから、探しにゆくこともできない。
　もう二度と逢うことは叶わないと諦めていたのだ。それが、今になって、ひょっこりと戻ってくるなんて。
　だが、エメがバスケットに入って一人で戻ってくるはずはないのだ。愛奈の脳裏に一人の男の顔が浮かんだ。エメをここに連れてこられるのは、悔しいけれど、あの男しかいない。
　何て憎らしい男。愛奈の身体を欲しいままに弄び慰み者にする癖に、ふっとこんな意外な優しさを見せたりする。
「反則よ、こんなの」
　愛奈はエメのすべすべした毛並を撫でながら一人、呟く。子猫は痩せてもいないし、気の艶も良い。どう見ても、誰かがきちんと世話をしていたとしか思えない。そして、それができるのは恐らく、ただ一人。
「こんなことをされると、憎めなくなっちゃうじゃない」
　愛奈はふるふると首を振った。いいえ、騙されるものですか。こんなことくらいで、私の気持ちを無視して好き放題にしたことを許せるはずがない。
　愛奈はともすれば萎えそうになる反抗心を奮い立たせる。だが、思えば、拓人がわざわざ海外に向かう飛行機の中から電話をかけてきたのも、エメのことを知らせたいからだったに違いない。
　残酷で優しい男。昔は彼が大好きだった時期もあった。今は大嫌い。あいつが私の身体をまるで玩具のように扱うから。籠の鳥のようにここに閉じ込めるから。
　拓人を嫌いな理由は幾つでもあった。でも、心のどこかでいまだに憎みきれない、嫌いになりきれない部分があることを、愛奈はよく知っている。
　それが何故なのかは判らなかった。ここまでとことん人格を無視された扱いを受けているのに、何故―？

早くあの男が帰ってくれば良い。唐突に浮かんだ想いに愛奈は自分でも愕いた。
ううん、あの男が帰ってくれば良いと思ったのは、ただ今のやり場のない感情を彼にぶつけたいからだけよ。こんなもやもやした気持ちはあの男のせいなんだから、あの人に思いきり叫んでやれば、きっとすっきりするもの。
それが単なるごまかし、自分の本当の気持ちを知ろうとしない自分への言い訳だとはこの時、まだ愛奈は気づいていなかった。
拓人が海外出張に出てから七日が過ぎた。その間、愛奈はボディガードの運転する車に送り迎えされて、毎日、学校に通った。マンションにいるときはエメと遊んで過ごし、食事も残さず食べた。
もちろん、断っておくが、食事をきちんと取っているのは何もあの男に言われたからではない。あの男がいなくなって執拗に夜通し責め立てられることもなくなったから、精神的にも身体も解放されて楽になった。だから、長らく感じていなかった空腹感を感じるようになっただけ。
学校にいるときはケータイの電源は切るが、校門を出るとすぐにオンにする。
いつケータイが鳴るかを心待ちにしている自分に気づいた時、愛奈は愕然とした。このケータイにかけてくるのは世界で一人しかいない。何で大嫌いな男からの電話を待ちわびるのか、そんな自分が自分で信じられず呆れた。

　そんなときも愛奈は適当な言い訳を考え出して自分を納得させた。これはきっと人恋しいからだと。今の愛奈の世界はこのマンションの中、彼に飼われている鳥籠の中だけなのだから、彼が愛奈の世界のすべてといっても良い。だから、きっと彼からの電話を待っているのだ。彼の声を聞きたいと思ってしまうのだ。
　だけど、その考え方は少しおかしい。今は拓人も高校へは行かせてくれている。学校に行けば親友の満奈実もいるし、他の大勢のクラスメートもいて、それなりに愉しい時間を過ごせた。だから、少なくとも今は愛奈の世界は鳥籠の中だけではないのに。
　悶々とする愛奈を嗤うように、ケータイは一度も鳴らなかった。そんなある日、拓人がいなくなって八日目のこと、明日はいよいよ拓人が帰ってくるという前日。
　実に久しぶりにケータイが鳴った。その時、愛奈はボディガードの運転する車で高校から帰宅途中だった。
―もしもし。
　嬉しげに弾んだ声で出たことに、愛奈自身は気づいていない。無言で運転するボディガードがチラリとこちらを窺っていた。基本的に彼らと愛奈が言葉を交わすことはない。彼らはあくまでも監視役としていつも少し離れた場所から愛奈を見守っているという感じだ。
　だが、当然、拓人からだと思っていた電話は実は全然違っていた。
―愛奈さまのお電話でよろしいでしょうか？
　丁重に問われ、愛奈は思わず頷いていた。
「はい、安浦愛奈ですが」
―私は拓人さまの第一秘書を務めている瀬道と申します。
　その名前なら聞いたことはある。とにかく頭の切れる男で、常に影のように社長に寄り添い、忠実無比、拓人の懐刀と目されているとか。
　でも、その秘書が何故、愛奈に電話をかけてくる必要があるのか。第一秘書ならば、拓人について現地へ赴いているはずだが。
　刹那、愛奈の胸に警鐘が鳴り響いた。拓人が電話をかけてこられないということは、彼が今、そんな状況にあるから？
　いや、幾ら何でも考えすぎだ。愛奈は自分の想いが杞憂であることを信じ、やり過ごそうとした。
―奥さまにどうしてもお伝えしなければならないことがございます。落ち着いてお聞き下さい。
　愛奈は今し方の不吉な予感が図らずも当たってしまうことを怖れた。不安のあまり、秘書が自分を〝奥さま〟と呼んだことにも頓着せず、叫ぶように言った。
「拓人さんに何かあったんですか？」
　一瞬の不穏な沈黙があり、それがこれから先、聞くであろうすべての事を物語っていた。
―本日昼過ぎ、社長の乗ったバスが大きな事故に遭いました。崖から谷底に転がり落ちて転覆、バスは炎上しました。現在のところ、死者十数名、生存者が数名とのことですが、生存者の中に日本人がいるかどうかの確認は取れていません。今も現地の警察や救助隊が必死の救助活動を続けていますが、何しろ谷底で足場が悪いものですから、難航しているようです。

「拓人さんが事故に？　そんな馬鹿な」
　愛奈は呟き、身体中の力が失われてゆくのを感じた。
　何故、アークのような大企業の社長が単身で観光バスに乗っていたか？　愛奈の疑問はすぐに解消された。瀬道はこんなことを言った。
―彼(か)の国はいまだ治安も不安定で、政情も安定していません。私はむしろ拉致とかテロとか別の意味で心配したのですが、社長はどうでもお一人で行くと言われて、止めるすべはありませんでした。
　今回、拓人が赴いたのは中近東の砂漠の国だった。油田をたくさん持ち、日本へもこの国からの輸入に頼っている部分は大きい。国土そのものはけして広くはないが、いまだに王政が敷かれ、国王が絶対君主として君臨しているというやや封建的な面がある。
　現在は王政に対抗する革新勢力が台頭してきており、王政派と国内を二分する勢いである。そのため、しばしばデモが起こり、革新派と王立の軍隊が衝突するといったことが起こった。砂漠の国といっても、国土のすべてが砂漠ではなく、一部に峻厳な山脈を有している。今回、拓人が向かったのはその山頂の小さな村の一つらしい。
―社長はデザートローズを探しに行かれたのです。
―デザートローズ？
　愛奈は鸚鵡返しに訊いた。
―私も宝石にはあまり詳しくはないのですが、何でも砂漠の薔薇と呼ばれる大変稀少な宝石だそうです。ウィザード山脈のとある山上の村にはとりわけ珍しく品質の良いデザートローズを集めている収集家がいるとのことで、その人物を訪ねていかれるとおっしゃっていました。
　そこで秘書はまた少し躊躇い、続けた。
―余計なことを奥さまのお耳に入れると後で社長からお叱りを受けるかもしれませんが、デザートローズは本来は砂漠で取れるものですから、わざわざ辺鄙な山奥まで行かれずとも、都の観光客相手の店にたくさん出ているのです。ですが、社長はこんなことを言われまして―。
　〝愛奈は俺のたった一つの宝石だ。最高の女には第一級の、世界で一番価値ある宝石を贈りたい〟
　それが秘書が現段階では社長から聞いた最後の科白となった。
　電話を切った後、愛奈は込み上げる涙を抑えきれなかった。拓人は自分に贈る宝石を買いに行こうとして、観光バスに乗った。その途中で悲惨な事故が起きてしまったのだ。
―何か土産を買ってきてやるから、大人しく良い子にしてるんだぞ。
　拓人がマンションを出るときの科白が今更ながらに思い出された。あの時、自分は何と応えただろう。いや、何も応えなかった。長い旅路に出る彼を見送りもせず、ふて腐れてベッドの中にいた。
　あの時、彼はデザートローズを買ってきてくれるつもりだったのだろうか。
　それなのに、自分は頑なに彼に背を向けた。
　それに、彼が出ていった後、自分は何を考えただろう。
―あんな男、この世からいなくなってしまえば良い。

よりにもよって、そんな想いを抱いたはずだ。
ああ、私のせいだ。私がいなくなっちゃえば良いなんて思ったから、拓人さんがこんなことに。
愛奈はもう堪え切れず、両手で顔を覆った。堪え切れない嗚咽が低いすすり泣きとなって洩れた。
と、それまで無言でハンドルを握っていた運転手の男が唐突に沈黙を破った。
「瀬道さんの話では、まだボスが死んだと決まったわけじゃないですよ。生存者の中にも死亡者の中にも名前がないってことは、まだ生きてるって望みもあるんですから」
そのひと言に、愛奈の泣き声が止まった。
「ボスは奥さんに滅茶苦茶惚れてますからね。たとえ地獄まで行っても、奥さんに逢いたくて引き返してきます。そんな人ですよ」
その声は愛奈が初めて聞いたボディガードの声だった。気のせいか、サングラスの向こうの細い瞳が優しく細められているように見えた。いつもは表情を消し去った無機質な印象が強いけれど、今はアンドロイドのような冷たい雰囲気ではなく、人間らしい温かな表情を浮かべている。

「あ、でも、ボスには内緒にしといて下さいね？　こんなことを奥さんに言ったって知れたら、クビは間違いないですから」
　恐らく普段は社長の身内と親しく接することは禁じられているに違いないが、愛奈の哀しみ様を見かねて声をかけたのだろう。
　今はその心遣いが泣きたいほど嬉しい。
「とにかく今は気をしっかりと持って下さい。ボスは必ず生きてます。ちょっとやそっとで死ぬようなヤワな人じゃないです。何せ、業界では、何があっても笑わない、沈まない、必ずのし上がる鉄の男って呼ばれてるんですよ。あ、これも内緒ね」
　少しおどけたような物言いに、愛奈は思わずクスリと笑った。
「あ、やっと笑いましたね。奥さん、もう少し笑った方が良いです。奥さんが哀しそうにしていると、ボスまで元気がなくなりますからね」
「拓人さんが？」
　信じられない話に思わず訊き返すと、黒服の男は朗らかに言った。
「いつもボス、零してますよ。女は一体、何をすれば歓んでくれるのか、どうやったら歓んでくれるんだろうって。いつかは大真面目に俺に訊くもんで、俺、マジでボスも焼きが回ったなと思いましたもん。女のことにかけては俺なんかよりボスの方がよほど百戦錬磨なのに、たかだか女子高生一人の機嫌を必死に取ってるなんて、以前のボスなら想像もできないっスしね」
　あ、と、彼が頭をかいた。
「何かこれじゃ、ボスにたくさんの女がいるように聞こえますね」
　愛奈はもう、こんなときなのに笑いが止まらなかった。
「気を遣って下さって、ありがとう。拓人さんが無事に帰ってきたら、ちゃんと向き合って話してみます」
　愛奈の言葉に、ボディガードはニッと笑って頷いた。それから後はいつものように彼は二度と愛奈に馴れ馴れしく話しかけようとはしなかった。
　不思議だった。あんな卑劣なやり方で自分の身体を奪った男のことなんて、心配する必要はない。いなくなれば、愛奈は自由になれるのに。何故、自分の胸はこんなにも不安にざわめくのか？
　今なら判る。いや、恐らく応えはとっくに出ていたのに、愛奈がその応えから眼を背けて、真実を見ようとしていなかったのだ。
　不思議なことに、あれほど好きだと思い込んでいた反町君よりも拓人のことばかり考える。もちろん、反町君のことは今でも好きだ。
　彼のことも一生、忘れることはないだろう。
―僕にもっと力があったら、君を攫ってゆくのに。
　泣きそうな表情で告げてくれたあの一瞬は、たとえ拓人という男がいたしても心から消えることはない。大切な青春の宝物だ。
　だけど、その想いは拓人へのそれに比べれば、ほんの淡いものでしかない。
―私がいちばん好きなのは拓人さんなんだわ。

幼いときから大好きだった従兄。優しい年上の男。一時は無理に身体を奪われ、毎日レイプのように抱かれることに怒りと失望を感じ、そんなことをする彼を憎いとすら思っていた。でも、その心の底では、やはり彼を憎みきれない、何か別の感情がまだ生きていることを私は知っていた。
多分、女として彼に抱かれて、理不尽に自分を奪い尽くそうとする彼を憎む心と、裏腹に彼を慕う心が同時に芽生えてしまったのだろう。それとも、幼いときからのほのかな憧れがいつしか彼を一人の男性として恋する女心に変わったのだろうか？　自分でも気づかなかった真実が彼に抱かれたことで、はっきりと自覚した？
いいや、そんな彼を好きになった理由なんて、今はもうどうでも良い。ただ、あの男が生きてくれてさえいれば。
ボディガードに言われなくても、彼が今までたくさんの女たちと拘わってきたのは判る。子どもの自分だって、これほど女について知り尽くしている男がこれまで女っ気なしで過ごしてきただなんて思わないし、信じない。
何より、彼ほどの美貌で社会的地位もある男なら、女の方が放っておかない。恐らく、その女たちの一人が涼子という女なのだろうということも。
もちろん、好きな男が別の女とベッドを共にしたりするのが嬉しいわけじゃない。でも、それが過去のことなら、愛奈は何とか受け容れられる。大切なのは未来、これからではないだろうか。たとえ拓人が涼子とどれだけの夜を共にしていようが、愛奈にプロポーズするために、きちんと彼女との関係を清算し愛奈一人に誠実に向き合おうとしてくれたのなら、それで構いはしない。
涼子のことも、拓人に逢ったら、ちゃんと訊ねてみよう。二人のこれからのためにも、どんな小さなしこりでも残しておかない方が良いのだ。
愛奈はあたかも向こうに自分が進むべき未来への道が続いているかのように、真っすぐに前を見つめた。丁度その時、ボディガードが運転する車がマンション前の駐車場に止まった。
更に数時間が経った。午後七時、愛奈は浴室でシャワーを浴びた後、部屋でじゃれつく子猫と遊んでいた。今はエメと無邪気に何も考えないで遊んでいられるのがせめてもの救いだ。
七月に入り、随分と陽が長い。陽は漸く暮れたばかりで、まだ西の空の端はうっすらとかすかに朱(あけ)の色をとどめて昼の名残を残している。
汗ばむ季節なので、室内は緩く冷房を効かせている。その時、しじまを破って、ケータイが鳴り響いた。
「もしもし」
二つ折りケータイを開くのももどかしく手に取る。思ったとおり、かけてきたのは秘書の佐伯だった。
―奥さま、朗報です。社長のご無事が確認できました。
何と拓人はその事故に遭ったバスには乗っていなかったとのことだ。山の天候は気まぐれだ。拓人が山上の村を訪れていた最中、急に晴れていた空が曇り、にわか雨が降った。その悪天候のため、拓人は村人に引き止められ、本来乗るはずの次のバスに乗って山を下りたとのことだ。

　だから、生存者・死亡者ともに名簿に名前がないのは当然である。
―神さま、ありがとうございます！
　愛奈はこれまで高校受験のときくらいしか神仏に祈ったことはないけれど、この瞬間だけは心から神に感謝した。

やっと拓人への気持ちに気づいたのに、もう遅すぎるのではと後悔の念に押し潰されそうだったのだ。
「エメ、お前をここに連れてきてくれた人が無事だったの。拓人さんが生きていたのよ」
　愛奈は子猫を膝に抱き上げ、人間に対するように語りかけた。子猫は利口そう瞳をくるっと動かし、本当に愛奈の言葉を理解しているようにも見えた。愛奈の瞳からひと粒の涙が溢れ、白い頬をつたった。
　二日後、予定より一日だけ遅れて拓人が帰国した。愛奈はボディガードに頼んで、空港まで連れていって貰うことにした。
「良いのかな。ボスに無断でこんなことしても」
　と、流石にこれには渋ったが、愛奈がどうしても迎えに行きたいのだと言うと、渋々、言うことをきいてくれた。
　拓人は羽田空港まで国際線で帰ってきて、そこからは国内線に乗り換えてＩ空港に到着する予定だ。マンションから空港までは車で一時間ほどだから、迎えにいけないことはない。
　手持ちの服はないので、制服を着た。
　午後一時、拓人の乗っているはずの飛行機が空港に着陸する。ゲートが開き、次々に昇降客がロビーに溢れ始めた。
　正面玄関へと続く長いエスカレーターの上方に長身の男が立った。どこに行っても拓人のルックスの良さと圧倒的な存在感は目立つ。通りすがりの若い女性がちらちらと彼を見て通り過ぎていくのが愛奈には判った。
　拓人の背後にはぴったりとビジネススーツ姿の男が寄り添っている。あれが秘書の瀬道だろう。
　エスカレーターが下に到着し、拓人がロビーへと足を踏み出す。
「拓人さん」
　愛奈は彼がこちらに気づく前に叫び、走り出していた。今日の彼はビジネススーツではなく、半袖のカーキ色のポロシャツ、グレーのズボンといったカジュアルな格好である。愛奈に声に気づいたのか、彼がかけていたサングラスを外した。
　その眼が愕いたように大きく見開かれる。
　走ってきた愛奈を拓人は愕きながらも、両手をひろげて受け止めた。
　いつしか忠実な秘書の姿はどこかへ消えている。気を利かせたに違いなかった。
「無事だったのね。私、ホントに心配したのよ。死んじゃったんじゃないかと思って」
　拓人が優しい笑みを浮かべた。
「馬鹿だな。俺がお前を置いて、一人で死ぬわけないだろうが」
　拓人は愛奈を抱きしめ、耳許で囁いた。
「迎えにきてくれて、嬉しいよ。それに、お前が泣くほど俺のことを心配してくれたのも」
「泣いてなんかないもん」
　愛奈が持ち前の負けん気ぶりを発揮すると、拓人はまた笑った。
「まあ、お前がそう言うのなら、それでも良いさ」

　彼がポロシャツの胸ポケットから小さな箱を取り出した。
「これをお前に」
　黒色の小さな箱にピンクのリボンが付いている。愛奈は渡されたそれを静かに開けた。
「あー」
　箱の中から現れたのはベージュ色をした薔薇の形の石だった。そっと指で持ち上げてみると、石にワイヤーが巻きつけられていて、ネックレス仕様になっている。
「綺麗」
　愛奈は眼を輝かせた。
「これはデザートローズといって、砂漠でしか取れない珍しい石なんだ。普通、プロポーズするときはダイヤモンドだろうけど、これもあまりに定番すぎるだろ。だから、これを婚約指輪の代わりとして贈るよ。俺の嫁さんになってくれ、愛奈」
「この石を買うために拓人さんは事故に遭うところだったのね」
　愛奈がしみじみと言うと、拓人が眉を寄せた。
「何でお前がそれを知ってるんだ？」
「瀬道さんに聞いたの」
「あいつ、お喋りなヤツだな」
　拓人はぼやいたが、口調ほど怒っている様子はなく、むしろ面白そうな表情である。
「ありがとう、歓んで頂きます」
　愛奈の言葉に、拓人が息を呑んだ。綺麗な顔には〝信じられない〟と書いてある。
　愛奈は微笑んだ。
「でも、これからは無茶はしないでね。私は宝石も何も要らない。拓人さんさえ側にいてくれれば、それで良いの」
「おい、愛奈。俺は今、夢を見ているのか？」
　拓人はまだ夢見心地のような顔をしている。
「俺はお前に対して酷いことばかりした。そんな俺をお前は嫌っていたはずなのに」
「もう一度、最初から始めましょう。今、この場所から」
　愛奈は拓人の眼を見つめながら言った。もうこの男の傍以外に私の居場所はない。想いを込めた瞳の中に愛奈の固い決意を見たのか、拓人が頷いた。
「そうだな。俺はお前を手に入れたいと焦るあまり、やり方や順番を間違っていた。もう一度、俺にチャンスをくれ。俺には一生、愛愛奈だけだ。この世の誰よりも幸せにするよ」
　拓人は愛奈から砂漠の薔薇（デザートローズ）を受け取る。彼女が解き流した長い髪をかき分け、細いうなじを差し出すと、そっとネックレスをかけた。制服の胸許に純白の薔薇が今、たおやかに花ひらいた。

エピローグ

☆☆

その夜。

マンションの寝室で拓人と愛奈は十日ぶりに身体を重ねた。

「ありがとう、俺にもう一度、幸せになれるチャンスを与えてくれて」

拓人が愛奈の身体中にキスの雨を降らせる。二人ともすべてを脱ぎ去り、一糸纏わぬ姿だ。

涼子のことについて訊ねた時、拓人は彼に応えられる限り、誠実に向き合って応えてくれた。愛奈の想像どおり、拓人は確かに二年間、涼子と愛人関係にあった。が、拓人の心には常に愛奈の存在があり、彼は愛奈との結婚を決意したのを契機に涼子に別れ話を切り出した。

そのため、嫉妬に狂い拓人を失うまいとした涼子が一方的に愛奈に嫌がらせを仕掛けてきたのだ。

その後、拓人は涼子に以前に提示した手切れ金代わりの慰謝料に更に上乗せした金額を進呈しようとしたが、涼子は

一馬鹿にしないで。ここまでして別れようとする男に追いすがるほど、未練がましくも男に飢えてもいないわ。

と、それらをすべて突き返してきたという。

いかにもあの女らしい啖呵の切り方だと、話を聞いた愛奈は納得できた。恐らく涼子は涼子で、拓人に本気だったに違いない。拓人という男を間に挟んでの出逢いでなければ、あの涼子という女とは歳は違っても良い友達になれただろうのにと少し残念だ。

拓人が愛奈に覆い被さっている。彼の腕が彼女の顔のすぐ側にあり、彼女は逞しい腕に閉じ込められた形だ。だが、互いの想いを確かめ合った今、この男の腕に閉じ込められるのはけして嫌ではない。

囚われた小鳥は籠から飛び立つのではなく、自ら籠を自分の生きる世界だと定めたのだ。けれど、拓人はもう二度と愛奈を狭い鳥籠に閉じ込めようとはしないだろう。愛奈は何故か、そんな確信があった。

拓人の唇が静かに降りてくる。自ら腕を伸ばして彼を引き寄せ、そのしっとりとした感触を受け止めながら、その夜、愛奈は世界中でいちばん幸福な花嫁となった。

（了）

ヒナゲシ

花言葉―恋の予感、未来の恋。別名、虞美人草、ポピー。

デザートローズ

宝石言葉ー愛と知性。

不必要な人との縁を切る、寛容さと深い愛情を育む。深い愛情を持って人と接することを可能にしてくれるパワーストーン。

砂漠の砂の中から見つかる薔薇の花に似て美しい鉱物。別名をサンドローズともいう。花びら状の形が薔薇に似ていることからこのように呼ばれている。

自分に本当に必要な人を見極め、その人との縁を取り持ってくれると共に、逆に不要な縁、害をもたらす人との縁は後腐れないように断ち切ってくれる効果あり。

あとがき

　あとがき

　岡山では珍しく、数年ぶりに雪が積もりました。皆さまお住まいのところは、いかがでしょうか？

　さて、今月の新作をお届けします。世はバレンタインも近しということで、今回は現代物の少しハードめなものを。

　私としては限界ぎりぎりの官能小説に挑戦という意味もあります。作品の内容としては意外とありがちなものかもしれません。でも、自分としては、いつものように精一杯頑張って書いてみました。少しでも何かを感じていただけましたなら、幸いです。

　来月はいよいよ〝小紅ちゃんシリーズ〟です。来月と再来月でいよいよ数年ぶりの江戸復帰作も完結です。まだまだ片付けなければならない山場が数え切れないほど残っているので、鋭意努力して出来るだけ納得のいく作品に仕上がるべく精進したいと思います。

　桜の咲く頃、思い入れのあるシリーズも完結とあいなりますように！

　それでは、今回もありがとうございました。

東　めぐみ拝

2014/02/09

監禁愛～奪われた純潔と囚われの花嫁～

http://p.booklog.jp/book/91663

著者：megumi33
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/megumi33/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/91663

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/91663

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ